

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No.97



2023年3月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

戦後の国際交流試合(1950~1954)

写真①



国際親善日米バスケットボール

写真②



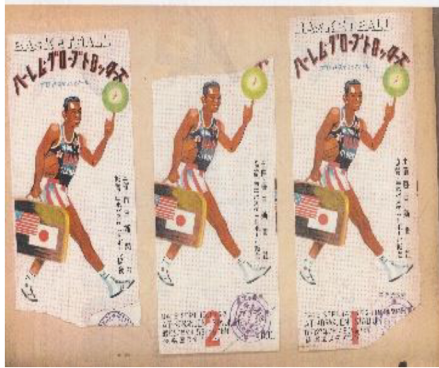
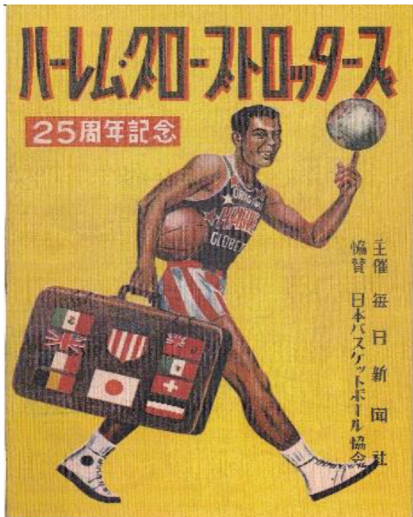
FAREWELL MEETING

写真③



日比交歓バスケットボール大会

写真④



ハーレム・グローブトロッターズ25周年



写真⑤



VFV 日米交歓バスケットボール試合

写真⑥



日比交歓バスケットボール大会

写真⑦



日米交歓バスケットボール試合

目 次

- 学校の部活動の在り方の変革 理事長 渡邊 誠 . . . 2
- FIBAワールドカップ2023アジア地区予選終わる 3
「AKATSUKI JAPAN」男子日本代表はグループF 3位で本戦に
- 第98回天皇杯 優勝は千葉ジェッツ 6
ファイナルラウンド・トーナメントの結果
- 第89回皇后杯・ファイナルラウンド 9
“ENEOS”が10連覇で27回目の優勝
- SoftBank ウィンターカップ2022 12
第75回全国高校バスケットボール選手権大会の結果
- Bリーグ情報 15
- 第24回Wリーグ情報 17
- 先人の軌跡 歴史部 . . . 19
— バスケットボール第2世代の人たち —
昭和8年版 スポーツ人名辞典（日本スポーツ協会版）
- 会員だより 須田 武志 . . . 22
嘘のような、本当にあった話
- 会員だより 上谷 富彦 . . . 24
スポーツと障がいのある人たち —その5—
- 書籍紹介 佐々木 政治 . . . 26
「社会を変えるスポーツイノベーション」
- 高校籠球ふるさと記（新潟県編） 事務局 . . . 29
- 事務局だより 事務局 . . . 39
- プラザ こぼればなし 40

学校の部活動の在り方の変革

理事長 渡辺 誠

昨年12月に公開されたアニメ映画「THE FIRST SLAM DUNK」(東映)の興行収入が100億円を超え話題となっている。バスケットボールの学校部活動を題材にした単なるアニメでなく、映画のストーリーに多くの人が感銘を受けている。

「スラムダンク」のアニメ動画がテレビで放映されていた1996年(1993年～1996年TV朝日放映)、日本協会の競技者登録数は1,008,822人、チーム加盟数36,227チームで史上最高(2021年現在、競技者登録数は、551,720人、チーム加盟数は、31,953チーム)。当時の小学、中学、高校の「バスケットボール」の部活動に大きく影響し、学校体育(部活動)の人口が急激に増加したと考えられる。

世界のバスケットボール人口は、4億人と言われている、世界の人口を80億人と想定すると約5%の人がバスケットボール人口と考えられる。日本の人口12,000万人と計算すると60万人が日本のバスケットボール人口と推測できる。(厳密には、登録していない競技者や単なる愛好者がいるのでバスケットボール人口とは?)

学校の部活動(大学を除く)の競技者登録数(男女合計)の比較

1996年度	2021年度
高校 178,364人(17.7%)	U18 139,413人(25.3%)
中学 571,941人(56.7%)	U15 222,581人(40.3%)
<u>ミニ 187,558人(18.6%)</u>	<u>U12 146,626人(26.6%)</u>
合計 937,863人(93.0%)	合計 508,620人(92.2%)

実に、ミニ(U12)、中学(U15)、高校(U18)の合計は、全競技者登録数の90%以上を占め、残りの10%は、大学・一般チーム。

1996年の中学生数430万人のうち13.3%の57万人が(部活動)登録し、2021年の中学生数約322万人のうち6.8%の22万人が(部活動)登録している。

(注:2021年度のU15、U18には、クラブやBユースチームも含まれている)

現在、「学校の部活動の在り方の変革」について対応が必要となっている。「少子化への対応」や「教員の負担軽減」などを目的に、国は、「公立中学校の部活動の地域移行」を進めている。昨年度から始まったスポーツ庁の推進事業を委託された自治体を中心に実践と模索(連合チーム・クラブなど)が始まっている。

※公益財団法人日本バスケットボール協会は、競技者登録を学制でなく、「U12」(小学生)、「U15」(中学・U15クラブ・Bユース)、「U18」(高校・定時制・高専・U15クラブ・Bユース)、「一般」と年齢別で区分している。

以上

FIBA ワールドカップ 2023 アジア地区予選終わる

「AKATSUKI JAPAN」男子日本代表はグループF 3位で本戦に

[編集部]

FIBA ワールドカップ 2023 アジア／オセアニア地区 2次予選（2nd Round）の Window 6 が 2023 年 2 月 23 日～26 日に開催され、地区予選の全日程が終わった。

Window 6 での日本代表チーム戦績

日本代表チーム（2022 年 11 月 18 日現在の FIBA 世界ランク 38 位）はホームゲームとして群馬県高崎市高崎アリーナで、2023 年 2 月 23 日（木・祝）にイラン（同 20 位）、2 月 26 日（日）にバーレーン（同 84 位）とそれぞれ対戦した。

日本代表チームの主なスタッフと出場選手

<主なスタッフ>

役 職	氏 名	所 属
ヘッドコーチ	ホーバス トム	公益財団法人日本バスケットボール協会
アソシエイトヘッドコーチ	ゲインズ コーリー	公益財団法人日本バスケットボール協会
アシスタントコーチ	勝久 ジェフリー	川崎ブレイブサンダース

<「AKATSUKI JAPAN」男子日本代表選手>

年齢・所属は2023年2月22日現在

NO	選手名	P	身長 cm	体重 kg	年齢 歳	所 属
2	富樫 勇樹	PG	167	65	29	千葉ジェッツ
6	比江島 慎	SG	191	88	32	宇都宮ブレックス
16	金近 廉	SF	196	84	19	東海大学
17	須田 侑太郎	SG	190	87	31	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ
19	西田 優大	SG	190	90	23	シーホース三河
24	ホーキンソン ジョシュ	C/PF	208	106	27	信州ブレイブウォリアーズ
33	河村 勇輝	PG	172	68	21	横浜ビー・コルセアーズ
34	渡邊 飛勇	C	204	106	24	琉球ゴールデンキングス
δ	43 永吉 佑也	PF	198	115	31	ライジングゼファー福岡
	45 テーブス 海	PG	188	85	24	滋賀レイクス
	71 井上 宗一郎	PF	201	105	23	サンロッカーズ渋谷
	91 吉井 裕鷹	SF	196	94	24	アルバルク東京
ψ	99 川真田 紘也	C	204	110	24	滋賀レイクス
	平均		192.7	92.5	25.5	

PG ポイントガード、SG シューティングガード、SF スモールフォワード、PF パワーフォワード、C センター

δ：イラン戦のみ、

ψ：バーレーン戦のみ

アジア／オセアニア地区2次予選は対戦国同士がホームゲームとアウェイゲームで2試合ずつ戦い、勝率によって順位を決める方式。2月に行われたイラン戦とバーレーン戦はいずれもホームゲームで、会場の高崎アリーナは両日とも満員の盛況だった。

2月23日（木・祝） vs. イラン（高崎アリーナ）

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	22	30	23	21	96
イラン	16	13	16	16	61

アウェイ戦でイランに敗れた日本だったが、ホームゲームともあってノビノビとした戦いを見せて観客を喜ばせた。

アウェイ戦で痛敗した経験からか、最初から最後まで厳しいディフェンスを持続、これによりイランの3Pシュート成功率をわずか17%に抑えたことが大きい。またオフェンスも早い展開から3Pシュートを多発、#43 須田を中心に49%の成功率を叩き出した。#24 ホーキソンを中心とするリバウンドでも48本対33本とイランを圧倒、苦し紛れにシュートに持ち込むイランに隙を与えなかった。

この試合日本の3Pシュート成功率は46%と男子にしては驚異的な数字、2Pシュート成功率54%、フリースロー成功率83%もイランを圧倒し、ターンオーバーも5本とよい成績で、それらが総得点96に繋がった形。

最近のバスケットボールではポイントガードの出来・不出来によってチームの戦い方や得点まで影響すると言われるが、日本のポイントガードに#33 河村が加わったことにより#2 富樫の負担が減り、チーム全体が終始同じペースで戦うことにつながっているようだ。

好調さが見えてきた3Pシュートもドリブルからは殆ど打つことが出来ず、速いパス回しもその成功率を高める要因となっていることは間違いない。

2月26日（日） vs. バーレーン（高崎アリーナ）

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
日本	32	19	22	22	95
バーレーン	19	16	22	15	72

イランに圧勝してから3日後、日本はこの日も出だしから得意とする速いゲーム展開でバーレーンを圧倒した。前半から思い切った3Pシュートと素早いパス回しでシュートチャンスを生み出し、一度もリードされることなく安定した戦いぶりを見せた。

速いゲーム展開の基となるポイントガードを、#2 富樫と#33 河村が交替でこなしたことにより開始から終了まで一貫したスピードが保たれ、これに答えるインサイド陣の好調さが引き出されるという良い展開。それに第4クォーターでは#2 富樫と#33 河村の2ポイントガードの布陣も見られ、ホーバス・ヘッドコーチの指揮も多様となった。

数字的にも#24 ホーキソンが22得点10リバウンドでダブルダブルの活躍、続く#17 須田が3ポイント6本を含む20得点を挙げ、ポイントガードの#33 河村も13得点9アシストと破竹の勢い、#2 富樫の6得点6アシストを加えガード2人で15本のアシストも全体のゲーム展開を物語っている。

日本チームのシュート確率は2ポイント 63%、3ポイント 39%、フリースロー69%で、いずれもバーレーンを上回ったが、フリースロー成功率69%とターンオーバー8本にはまだ改善の余地がありそうだ。

グループF（2次予選終了時）の各チーム成績

順位	チーム	勝	負	オーストラリア	中国	日本	イラン	カザフスタン	バーレーン	*タイペイ / シリア
1	オーストラリア	11	1	○	○ 76-69 ○ 71-48	○ 80-64 ○ 98-52	○ 98-68 ● 0-20	○ 97-50 ○ 98-53	○ 104-50 ○ 83-51	○ 98-61 ○ 90-71
2	中国	10	2	● 69-76 ● 48-71	○	○ 79-63 ○ 106-73	○ 81-72 ○ 86-74	○ 68-56 ○ 71-59	○ 80-67 ○ 80-67	○ 94-58 ○ 97-56
3	日本	7	5	● 64-80 ● 52-98	● 63-79 ● 73-106	○	● 68-79 ○ 96-61	○ 73-48 ○ 81-61	○ 87-74 ○ 95-72	○ 76-71 ○ 89-49
4	イラン	6	6	● 68-98 ○ 20-0	● 72-81 ● 74-86	○ 79-68 ● 61-96	○	● 69-73 ● 60-68	○ 82-66 ○ 100-64	○ 80-68 ○ 91-56
5	カザフスタン	5	7	● 50-97 ● 53-98	● 56-68 ● 59-71	● 48-73 ● 61-81	○ 73-69 ○ 68-60	○	○ 95-48 ● 51-62	○ 84-74 ○ 81-71
6	バーレーン	2	10	● 50-104 ● 51-83	● 67-80 ● 67-80	● 74-87 ● 72-95	● 66-82 ● 64-100	● 48-95 ○ 62-51	○	● 64-80 ○ 76-67

*：チャイニーズ・タイペイ

日本はワールドカップ開催国ゆえに出場資格は与えられているが、予選大会で総合3位となり堂々と出場枠を獲得した。

東京オリンピック女子で銀メダル獲得に貢献したホーバス・ヘッドコーチが、今度は男子の育成を担当していただき、男子日本代表は着実に力をつけてきているように思える。ホーバス・ヘッドコーチは女子同様に、速いバスケット、3ポイントシュートの充実、厳しいディフェンスを目指して強化に励んでおられるが、若い選手の台頭やシュート成功率のUPなど、具体的成果として表れていると感じる。

このあと選手たちは各々の所属チームに帰るが、8月のワールドカップまで、そう時間はない。個々の選手が緩むことなく精進を重ね、サッカー同様ワールドカップでベスト8を目指して努力していただきたい。

これらのことが次のパリ・オリンピック出場の道へとつながるわけだから。

「FIBA ワールドカップ 2023」の出場国

FIBA から2月27日にワールドカップ出場国が発表された。開催国枠の日本とフィリピンのほか、各地区から下記30チームの出場である。

アフリカ（5）：アンゴラ、カーボベルデ、コートジボワール、エジプト、南スーダン
アジア/オセアニア（6）：オーストラリア、中国、イラン、ヨルダン、レバノン、
ニュージーランド

アメリカ（7）：ブラジル、カナダ、ドミニカ共和国、メキシコ、プエルトリコ、
USA、ベネズエラ

ヨーロッパ（12）：フィンランド、フランス、ジョージア、ドイツ、ギリシャ、
イタリア、ラトビア、リトアニア、モンテネグロ、セルビア、スロベニア、スペイン
（各地区国名は、英字アルファベット順）

今後、予選グループの組合せが4月29日に決定され、優勝を決める8チームによる決勝トーナメントは9月5日から10日まで開催される。

以上

第 98 回天皇杯・優勝は千葉ジェッツ

ファイナルラウンド・トーナメントの結果

[編集部]

2022 年度第 98 回天皇杯・全日本バスケットボール選手権大会は、各都道府県代表が争う 1 次ラウンドから勝ち進んだ 7 チームに 2 次・3 次ラウンドと順次 B リーグチームが参加する 4 次ラウンドが 12 月 7 日(水)に終了した。

続くファイナルラウンドは 4 次ラウンドの各ブロックで勝ち進んだ 4 チームに前年度の 1 位・2 位チームを加えた 6 チームが下記の組み合わせと日程により対戦し、千葉ジェッツが 4 年ぶり 4 回目の優勝を飾った。

準々決勝	1 月 4 日：	千葉大会会場	船橋総合体育館（船橋アリーナ）
		群馬大会会場	太田市運動公園市民体育館
準決勝	2 月 15 日：	栃木大会会場	ブレックスアリーナ宇都宮
		沖縄大会会場	沖縄アリーナ
決勝	3 月 12 日：	有明コロシアム	

ファイナルラウンド結果

		1月4日	2月15日	3月12日
1位	宇都宮ブレックス			
①	千葉ジェッツ		65 77	
②	信州ブレイブウォリアーズ	89 82		87 76
2位	琉球ゴールデンキングス			
③	群馬クレインサンダース		96 91	
④	横浜ビー・コルセアーズ	77 80		

準々決勝

	Q1	Q2	Q3	Q4	OT1	計
千葉ジェッツ	28	15	16	20	10	89
信州ブレイブウォリアーズ	21	16	17	25	3	82

地元船橋アリーナで千葉ジェッツは、信州ブレイブウォリアーズの挑戦を受け、第 1 クォーターをリードしたが、その後ターンオーバーを多発して得点のがのびず。第 4 クォーターの残り 3 秒、信州の #24 ホーキンソンに劇的なシュートを決められて 77-77 の同点に追いつかれ延長戦に入る。延長戦では千葉が #21 エドワードや #2 富樫らの得点

でリードすると、これまで頑張ってきた信州は息切れしてシュートが入らなくなり、今一步のところでベスト4進出を逃した。

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
群馬クレインサンダース	16	31	16	14	77
横浜ビー・コルセアーズ	15	14	19	32	80

群馬大会会場で横浜を迎えた群馬クレインサンダースは、ホームでの声援を受けて第2クォーターを頑張り、前半47-29と18点をリードした。群馬は後半に入っても第3クォーター途中で58-38と20点をリードしこのままいくと思われた。しかし、第4クォーターに入ると横浜ビー・コルセアーズの猛追が始まり、残り18秒で77-78と逆転する。ここで群馬はファウルゲームに出るが、最後は全日本代表で活躍の#5河村がフリースローを決めて辛勝した。

準決勝

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
宇都宮ブレックス	7	16	27	15	65
千葉ジェッツ	15	28	21	13	77

栃木大会会場でアウェイの千葉ジェッツは、厳しいディフェンスで宇都宮ブレックスを前半43-23の20点差として圧倒。後半に入ると宇都宮は#6比江島が奮起して巧妙なスライドインシュートなどで猛追、第3クォーター残り2分48秒で56-46の10点差まで詰めよる。追われる千葉だったが、第4クォーターで前半にももの言った厳しいディフェンスを再開すると、宇都宮のシュートチャンスが少なくなり、最終的に千葉が77-65の12点差で勝利した。総得点が少ないゲームだったが、バスケットボールのだいご味でもあるディフェンス面で、執念を見せた千葉が相手をねじ伏せたといえる。

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
琉球ゴールデンキングス	29	27	18	22	96
横浜ビー・コルセアーズ	18	26	23	24	91

8月に開催されるワールドカップの会場である沖縄アリーナは超満員、試合の方もこれら観客を沸騰させる熱戦を展開した。ホームチームの琉球ゴールデンキングスは、前半#30今村の3Pシュートや#45クーリーの強力なりバウンドなどでリードを広げ、このままワンサイドゲームかと思われた。第2クォーターに入ると、横浜ビー・コルセアーズはポイントガード#5河村の好リードや3Pシュートなどで徐々に得点差を詰め、第4クォーターの残り7分8秒、#5河村のシュートで76-77の1点差まで詰め寄った。その後1-3点差のゲームが少し続いたが、残り2分、琉球は#15松脇の連続シュートや#7ダーラムのフリースローで抜け出し、最終96-91の5点差で競り勝った。横浜の#5河村はこのゲームで45得点と大車輪の活躍。

決勝

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
千葉ジェッツ	19	27	20	21	87
琉球ゴールデンキングス	15	24	19	18	76

決勝戦は念願の初優勝を狙う琉球ゴールデンキングスと4年間優勝から遠ざかっていたリーグ戦最多勝の千葉ジェッツの対戦となった。久しぶりの開催となった有明コロシアム体育館は満員の観客で、琉球ゴールデンキングスを応援する金色のシャツを着た人と千葉ジェッツを応援する赤色のシャツを纏ったブースターで埋め尽くされた。

第1クォーター、怪我でセンターのエドワードを欠いた千葉ジェッツだったが、#4 ムーニーの連続3Pシュートや#31 原の3Pシュートでリードする。琉球ゴールデンキングスも7分過ぎに12-11と追いつくが再びリードされ、その後も点差は広がらなかった。しかし、この間千葉ジェッツのダブルチームによる強力なディフェンスに苦しめられ、シュート確率が上がらない。第2クォーターの2分、千葉ジェッツは#2 富樫の果敢なスライドインと3Pシュートで29-22と点差を広げる。琉球ゴールデンキングスも鋭いスライドインからアウトサイドにパスを出して得点し、7分に32-35の3点差に迫る。しかし、今度はディフェンスが甘くなって千葉ジェッツ#31 原に3Pシュートを多く決められ同点までには至らず、44-39の7点差で千葉ジェッツが優位に立つ。

琉球ゴールデンキングスは前半2Pシュート成功率69%と千葉ジェッツの57%を上回ったが3Pシュートで僅か19%にとどまって追い上げが成功しなかった。千葉ジェッツの3ポイント成功率40%がリードに繋がっている。

後半、第3クォーター、琉球ゴールデンキングス#30 今村が3ポイントシュートを決めると千葉ジェッツも#2 富樫が連続3Pシュートを決めて争う。5分過ぎ琉球ゴールデンキングスは#30 今村のシュートで48-51と3点差に迫ったが、千葉ジェッツの#33 ムーニーがダンクシュートを決めて勢いづき61-51と引き離す。第4クォーター必死に攻める琉球ゴールデンキングスだったが、どうしても5点差までしか追い上げられない。対して千葉ジェッツは追い上げられると#2 富樫や#31 原が3Pシュートを決めてまた引き離す展開となり、結局リードを保ってゲームコントロールし4年ぶりの優勝となった。

この試合千葉ジェッツは#2 富樫が19得点 8アシスト、#31 原が20得点、#33 ムーニーがダンクを含む17得点 12リバウンドの活躍で安定して戦い、厳しいディフェンスも功を奏した。

MVP

試合後、報道陣の推薦による個人表彰があり、MVPには千葉ジェッツ#2 富樫が選出されトロフィーとともに賞金100万円が贈られた。

大会ベスト5

#2 富樫 (千葉ジェッツ)、#31 原 (千葉ジェッツ)、#45 クーリー (琉球ゴールデンキングス)、#30 今村 (琉球ゴールデンキングス)、#5 河村(横浜ビー・コルセアーズ)

以上

第 89 回皇后杯・ファイナルラウンド

“ENEOS” が 10 連覇で 27 回目の優勝

[編集部]

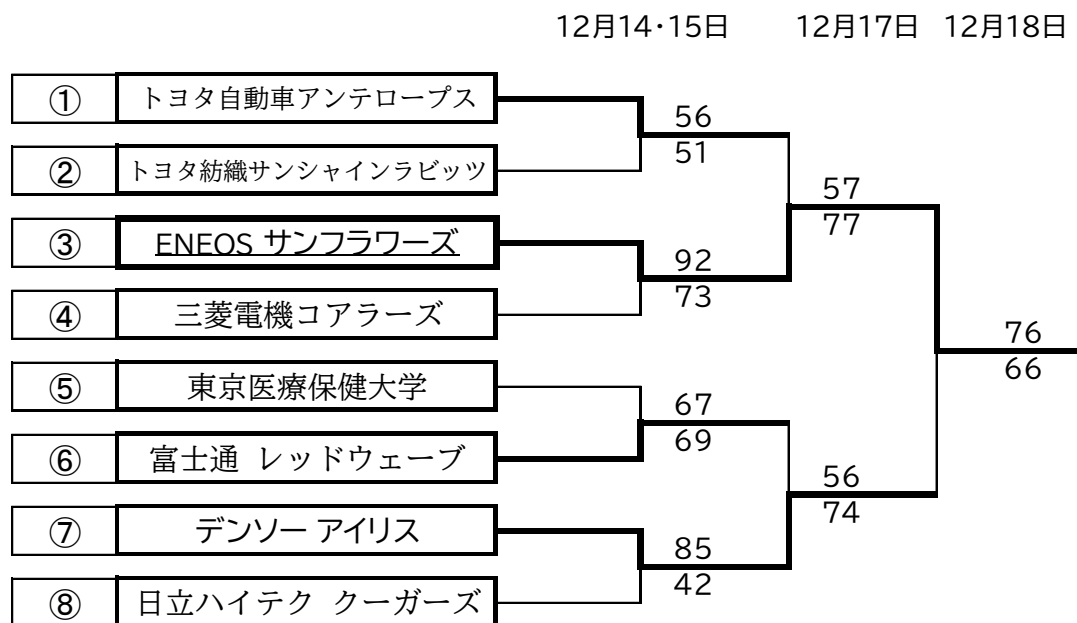
2022 年度第 89 回皇后杯全日本バスケットボール選手権大会は、12 月 14 日(水)～18 日(日)に、ファイナルラウンドが国立代々木競技場第二体育館で開催された。

東京都代表でWリーグのシャンソン化粧品に勝利した東京医療保健大学は、全日本大学バスケットボール選手権大会(通称インカレ)の決勝(12月11日)で優勝を遂げ、本大会のファイナルラウンドに進出した。学生チームが皇后杯のファイナルラウンドに並んだことはラウンド制導入後初めてで健闘を称えたい。

<ファイナルラウンド>

ファイナルラウンドは2次ラウンドの各ブロックで勝ち進んだ8チームが下記の組み合わせと日程により国立代々木競技場第二体育館で対戦した。

結果は下記のとおりである。



準々決勝 注目の2試合

次の2試合で接戦が演じられ、本命がかろうじて準決勝に進んだ。

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
トヨタ自動車アンテロープス	17	13	10	16	56
トヨタ紡織サンシャインラビッツ	19	13	7	12	51

トヨタ自動車は前半を 30-32 で 2 点のビハインドを負ったが、後半もシュートが決まらず 56-51 と 5 点のみのリードで苦戦した。

3Pシュートは、トヨタ自動車で#3馬瓜が第1クォーター終了間際に1本を決めたのみで1/25の成功率、トヨタ紡織も#8東藤の3本を含み6/20の低い成功率であった。

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
東京医療保健大学	17	19	14	17	67
富士通レッドウェーブ	16	15	20	18	69

富士通が東京医療保健大学に脅かされた。東京医療保健大学は、第1クォーター、シーソーゲームで1点のリード、第2クォーター開始直後の逆転もすぐに再逆転するとそのままリードを続け一時点差を広げたが、その後追い詰められて前半を36-31で終える。

後半第3クォーター、最初の3分間はリードを広げるが徐々に点差を詰められて逆転され、50-51で終わる。第4クォーター、残り3分ほどで一時逆転したが、その後5点差まで離された。終盤、#18池松の3Pシュートで2点差に迫ったが最後の2Pシュートが決まらず涙をのんだ。富士通はロースコアゲームのうえ、フリースローの不調(7/12)で苦労した。

準決勝

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
トヨタ自動車アンテロプス	13	26	8	10	57
ENEOSサンフラワーズ	24	13	19	21	77

トヨタ自動車対ENEOSは両者ともにシュートが決まらず、トヨタ自動車が#23山本の得点で前半39-37と2点のリード。しかし後半、トヨタ自動車の不振が続く一方で、ENEOSは#10渡嘉敷が活躍し、後半のみで18点を稼いで勝利した。

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
富士通レッドウェーブ	10	17	14	15	56
デンソーアイリス	22	20	26	6	74

富士通対デンソーは、デンソーが赤穂ひまわりと赤穂さくらなどの活躍で快調な得点を重ね、元気のない富士通に快勝した。

決勝

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
ENEOSサンフラワーズ	17	22	10	27	76
デンソーアイリス	20	17	13	16	66

決勝戦は、前人未踏の10連覇がかかったENEOSと、優勝を賭けた7度目のチャレンジとなるデンソーの大一番。

ENEOSは今季トヨタから移籍した長岡のシュートから始まり、デンソーは成長著しい赤穂さくらや赤穂ひまわりの得点でお互いに譲らない戦況となり前半ENEOSが39-37と2点のリード。

第3クォーターに入っても双方の厳しいディフェンスで得点が伸びず、ENEOSは49-50と1点のビハインドを負う。

第4クォーター開始早々、ENEOSは#10 渡嘉敷が連続シュートを決めると一気に引き離しにかかる。その後やや疲れが見えたデンソーのディフェンスが甘くなるとENEOSの調子が上がり、あっという間に点差が開いてしまう。デンソーはタイムアウトを取って立て直しを図るが、奮起した渡嘉敷の攻撃を止めることが出来ず、またもや皇后杯を逃した。

ENEOSは、トヨタ自動車から移籍した長岡が40分フル出場で18得点、渡嘉敷もフルで32得点22リバウンドと、その身体能力の高さを発揮、ポイントガードの宮崎も10得点10アシストを挙げ、ベテラン勢の活躍が最後まで衰えず勝ち切った。

対するデンソーは第3クォーターまで接戦を演じ、念願の優勝に手が届きそうだったが残念な結果となった。赤穂ひまわりが16得点、赤穂さくらが14得点を挙げて対抗、チームリバウンドでもENEOSの36に対して34、ターンオーバーではENEOSの10に対して6と優位に渡り合えたが、第4クォーターのシュートミスによってシュートの確率が一気に下がり苦杯を舐めた。すなわち3P確率はENEOSの40%に対してデンソーは23%、2PでもENEOSの57%に対して、48%でこの辺りが今後の課題となりそうだ。

あとがき

過去、全日本総合選手権大会は、お正月の大きな大会として代々木第二体育館に連日多くの観客を集めて開催されてきた。

最近では国際大会やリーグ戦日程などに左右され、毎年開催日程が変わっていて、天皇杯、皇后杯の価値観が薄れてきたように思える。全日本選手権大会ゆえに、ある程度開催日程を固定化した方がバスケットボール界にとってもベターではなかろうか。

昨年の東京オリンピックで銀メダルに輝いた、女子日本代表選手が所属するチーム同士のファイナルトーナメント戦ということで、中身の濃い試合展開を期待したが外れた。

各チームともディフェンスを強化したためかもしれないが、肝心の3Pシュート成功率が思ったより低く、日本が得意とする外角からの攻撃に今一つ不安を覚える大会であった。

皇后杯は日本女子バスケットボール界の最高峰となる大会であるはずだが、全体的にその得点力の無さには大きな失念を覚える。優勝のENEOSや二位のデンソー以外のチームは、フィールドゴール成功率が低い。

バスケットボール競技は得点を争うゲームであり、厳しいディフェンスの中でも一試合に80点は欲しいもの。今回のファイナルラウンドをみて、参加8チームのうち、一試合で70点を超える得点を挙げているのは3チームのみであり、Wリーグ所属チームの皆さんに奮起を期待する。

そんな中、元日本代表でENEOSに所属していた吉田亜沙美さんがアシスタントコーチを務める、学生の東京医療保健大学がファイナルラウンドへ進出したことは、一つの涼風として評価していいのではなかろうか。

以上

SoftBank ウインターカップ 2022

第 75 回全国高校バスケットボール選手権大会の結果

[編集部]

年末恒例の全国高校選手権大会はメインを東京体育館、サブを大田区総合体育館として 23 日から 29 日にわたって開催された。勝ち上がりトーナメント表を添付し、概要を記す。

女子は、京都精華学園が初優勝・インターハイと 2 冠

京都精華学園は決勝戦まで危なげなく勝ち進んだが、決勝戦相手の札幌山の手は 3 回戦で明星学園（東京）に第 4 クォーター開始で 2 点のビハインドを負う苦戦から逆転して 100-96 で勝利し、決勝までコマを進めている。

女子決勝

	Q1	Q2	Q3	Q4	計
京都精華学園	36	29	15	19	99
札幌山の手	22	19	23	17	81

決勝は京都精華学園が前半から点差を付け、第 3 クォーターの札幌山の手への追い上げを抑えて、ウインターカップを初優勝し、インターハイとともに夏冬の制覇を成し遂げた。札幌山の手は、11 年ぶりの優勝へ向けて奮闘したが、残念な結果に終わった。

◆大会女子ベスト 5

- ・イゾジェ ウチェ ・八木 悠香 ・堀内 桜花 （以上、京都精華学園）
- ・森岡 ほのか ・岡井 遥香 （以上、札幌山の手）

男子は、開志国際が初優勝

福岡第一は決勝まで危なげなく勝ち進んだ。一方、優勝校の開志国際は、準決勝で藤枝明誠（静岡）に前半 5 点のビハインドを負い第 3 クォーターに逆転、第 4 クォーターに追い上げられたが最後は 78-76 と逃げ切って、この難関を突破している。

男子決勝

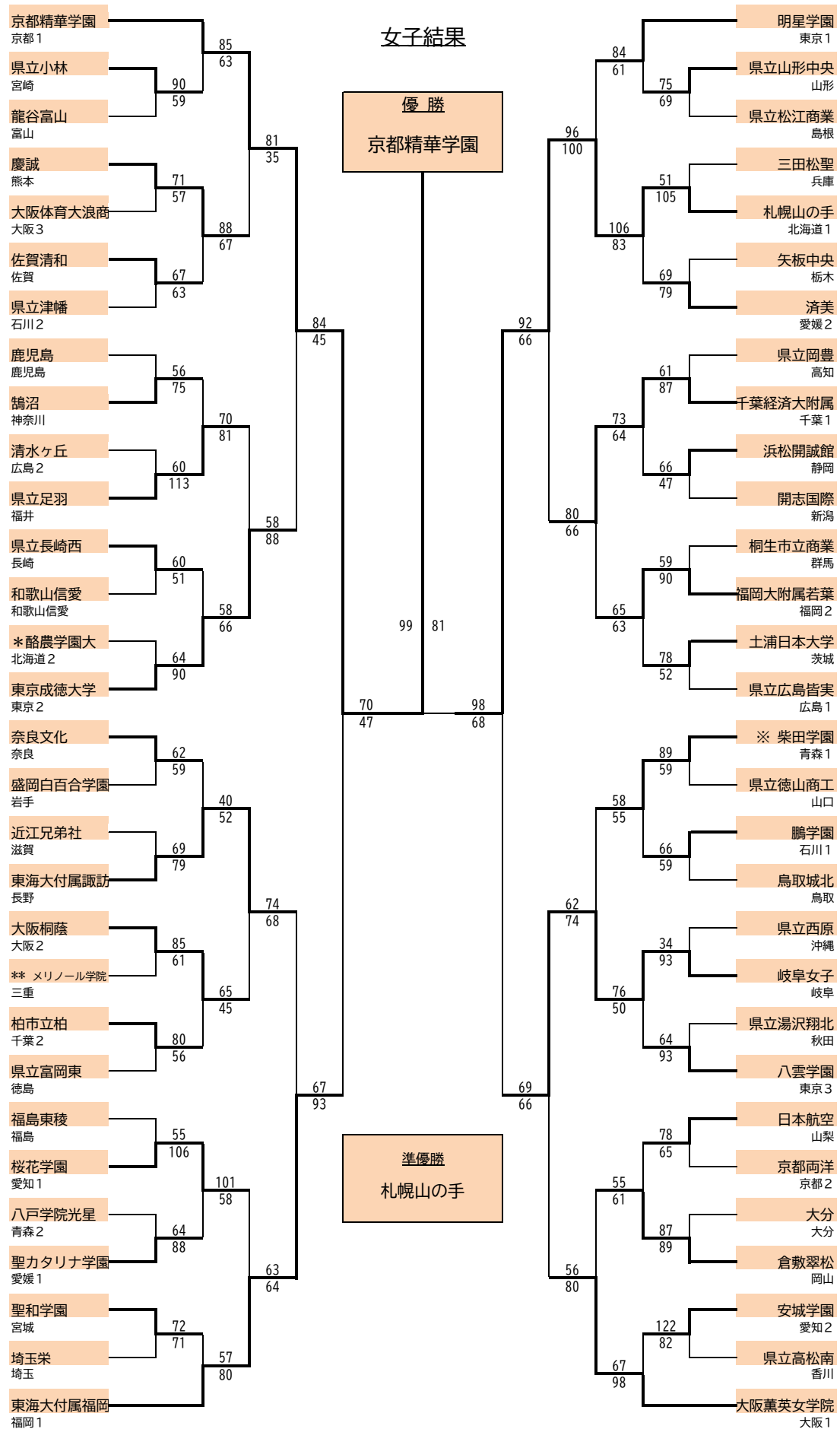
	Q1	Q2	Q3	Q4	計
福岡第一	27	9	12	23	71
開志国際	22	25	17	24	88

決勝は開志国際（新潟）が、夏のインターハイ決勝で 1 点差の逆転負けを喫した福岡第一に第 1 クォーターこそビハインドを負ったが、以降は危なげなくリードを続けてリベンジを果たし、悲願の初優勝を決めた。

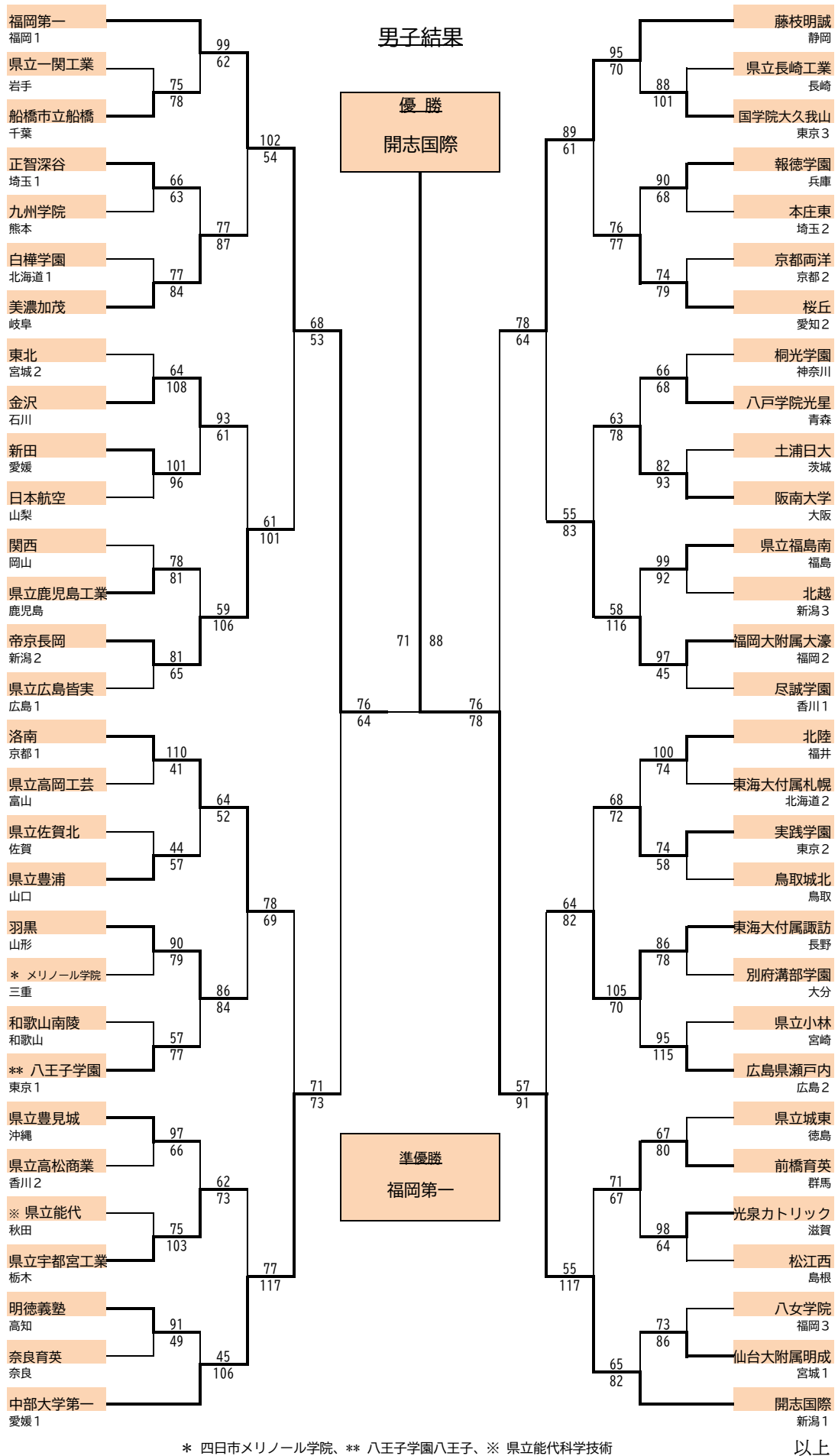
◆大会男子ベスト 5

- ・武藤 俊太朗 ・介川アンソニー翔 ・バシール ファイサル モハメッド（以上、開志国際）
- ・轟 琉維 ・城戸 賢心 （以上、福岡第一）

女子結果



* 酪農学園大学附属とわの森三愛、** 四日市メリノール学院、※ 柴田学園大附属柴田学園



Bリーグ情報

[編集部]

2022-2023 シーズン

今シーズンのB1リーグは、24クラブが東地区、中地区、西地区に分かれて、レギュラーシーズンリーグ戦（交流戦を含む）を各クラブとも60ゲーム行い、各地域の上位2クラブに加えて、各地区3位以下は3地区で勝率上位の2クラブが出場できる決勝トーナメントで最終順位を競う方式で進められている。

この間、8月開催の男子ワールドカップアジア予選と日程が重なるため、一時中断しているが、リーグ戦は上位を目指すクラブの混戦模様となっており、中、後半戦が楽しみである。

今期もプロリーグゆえか、クラブ間で選手のトレードや移籍などが数多く行われ、新人選手の活躍を含めて、選手層によってクラブの成績が上下する現象が起きている。

B1リーグこれまでの戦績

東地区

順位	クラブ名	勝	負	勝率	得点	失点
1	千葉ジェッツ	34	4	.895	3342	2817
2	アルパルク東京	30	8	.789	2934	2658
3	群馬クレインサンダース	21	15	.583	3008	2956
4	秋田ノーザンハピネッツ	21	17	.553	3026	2898
5	宇都宮ブレックス	20	18	.526	2788	2753
6	茨城ロボッツ	14	24	.368	3041	3153
7	仙台89ERS	12	26	.316	2724	2897
8	レバンガ北海道	9	29	.237	3116	3457

千葉ジェッツが圧倒的な勝ち星で群を抜いている。勝率、得点ともB1リーグトップで決勝トーナメント進出は確実。ポイントガード富樫のゲームコントロールが光り、原の3ポイントシュートも貢献度が高い。今季新しく就任したジョン・パトリックヘッドコーチのディフェンスを重視した指揮ぶりもうまくマッチしゲームに安定感がある。

続くアルパルク東京も1桁の負け数で、このまま進めば千葉ジェッツとともに決勝トーナメント進出は間違いなさそうだ。

群馬クレインサンダースと秋田ノーザンハピネッツは開幕当初頑張って注目を集めたが荒っぽいゲーム展開とディフェンスのまずさから上位チームに引き離され、このままでは決勝トーナメント進出は難しそう。

かつて得点王に輝いた折茂氏が社長を務めるレバンガ北海道は、健闘するものの1桁の勝ち数で、最下位に甘んじている。得点はそれなりに挙げているのにディフェンスの甘さとミスが多さが多くの失点につながり、なかなか勝率をUPできない。バスケットボールは、当然得点も必要だが強固なディフェンスとターンオーバーを減らすことも勝ちにつながる大きな要因であることを物語っている。

中地区

順位	クラブ名	勝	負	勝率	得点	失点
1	川崎ブレイブサンダース	23	15	.605	3075	2962
2	横浜ビー・コルセアーズ	23	15	.605	3086	2939
3	信州ブレイブウォリアーズ	18	20	.474	2854	2768
4	サンロッカーズ渋谷	16	20	.444	3002	3098
5	三遠ネオフェニックス	16	22	.421	3043	3104
6	シーホース三河	14	24	.368	2854	2986
7	富山グラウジーズ	7	31	.184	2908	3264
8	新潟アルビレックスBB	5	33	.132	2759	3376

川崎ブレイブサンダースと横浜ビー・コルセアーズが同率で首位を競っているが、これまでなかなか成績が上がらなかった横浜ビー・コルセアーズにおいて、ポイントガード河村の大活躍が成績を押し上げている。男子日本代表でポイントガードの富樫と肩を並べるほどの技術とスピードは目を見張るものがあり、これからのゲーム展開に期待したい。

一方過去多くの戦績を誇ってきたシーホース三河が、負け越し10で6位に甘んじていることはいかにも寂しい。ここでも優秀な選手の流失が響いているのかもしれない。

最下位の新潟アルビレックスBBの勝率13%は頂けない。このままでいくとB2リーグへの自動降格になってしまい奮起を望みたい。

西地区

順位	クラブ名	勝	負	勝率	得点	失点
1	島根スサノオマジック	31	7	.816	3199	2861
2	琉球ゴールデンキングス	29	9	.763	3083	2757
3	広島ドラゴンフライズ	28	10	.737	3185	2948
4	名古屋ダイヤモンドドルフィンズ	27	11	.711	3300	2929
5	大阪エベッサ	18	20	.474	2914	2956
6	ファイティングイーグルス名古屋	18	20	.474	2848	2922
7	京都ハンナリーズ	15	23	.395	2920	3041
8	滋賀レイクスターズ	5	33	.132	2801	3310

今シーズン一番の激戦地区が西地区だろう。島根スサノオマジックと琉球ゴールデンキングスが一步リードしているが、4位の名古屋ダイヤモンドドルフィンズまでは紙一重の差とっていい成績。4クラブとも勝率71%を上回っていて、全地区を合わせてみると勝率で3位以上の成績を挙げていて、決勝トーナメント進出の2番目の条件であるワイルドカードに相当する。

まだシーズンが続くので断定はできないが、一番注目に値する西地区と云っていいだろう。過去どちらかと云えば東地区側のクラブが強者となっていたが、今シーズンは西地区側のクラブの良い成績が目立つ。

最下位の滋賀レイクスターズは、新潟アルビレックスBB同様、奮起しないと自動降格対象になってしまう可能性があり、後半戦に期待したいもの。

以上

第24回Wリーグ情報

[編集部]

・第24回Wリーグ

レギュラーシーズン

レギュラーシーズンは2022年10月19日の開幕戦（トヨタ自動車—ENEOS）から2023年3月19日までの14チームによる2回戦総当たり（1チーム当たり26試合）、全364試合を全国各地で行われている。

2023年2月19日現在の順位は下記の通り

順位	チーム	勝ち点	勝	負
1	トヨタ自動車	35	17	1
2	三菱電機	34	16	2
3	デンソー	33	15	3
4	富士通	30	12	6
5	トヨタ紡織	30	12	6
6	ENEOS	30	12	6
7	シャンソン化粧品	28	10	8
8	日立ハイテク	27	9	9
9	アランマーレ	25	7	11
10	アイシン	24	6	12
11	東京羽田	21	3	15
12	山梨QB	21	3	15
13	新潟	20	2	16
14	姫路	20	2	16

注) 不成立、没収試合はなし。

勝ち点と同じ場合は下記の順序で順位を決定する。

- ① 当該チーム間での対戦試合の勝ち点
- ② 当該チーム間での対戦試合の総得失点差
- ③ リーグ戦での全試合の総得失点差
- ④ リーグ戦での全試合の総得点の大きいチーム

姫路イーグレッツは今シーズンより参入。キャプテンの白崎みなみ（埼玉県出身、奈良学園大卒）は得点ランキングで21.94(Avg)でトップに立っている。

プレーオフ

プレーオフは2023年4月1日のから2023年4月17日までレギュラーシーズン上位8チームによるステップラダートーナメント方式で、Wリーグ主管により行われる。

2023年2月19日現在、トヨタ自動車、三菱電機、デンソーのプレーオフ進出が決定している。

セミクォーターファイナル（4月1日、会場：新潟市東総合スポーツセンター）

1戦先勝方式（レギュラーシーズン=RS）

SQF1：RS5位対RS8位、SQF2：RS6位対RS7位

クォーターファイナル（4月2日、会場：新潟市東総合スポーツセンター）

1戦先勝方式

QF1：RS3位対SQF2（RS6／7位）の勝者

QF2：RS4位対SQF1（RS5／8位）の勝者

セミファイナル（4月8日～10日、会場：武蔵野の森総合スポーツセンター）

2戦先勝方式

SF1：RS2位対QF1（RS3／6／7位）の勝者

SF2：RS1位対QF2（RS4／5／8位）の勝者

ファイナル（4月15日～17日、会場：武蔵野の森総合スポーツセンター）

2戦先勝方式

SF1（RS2／3／6／7位）の勝者対SF2（RS1／4／5／8位）の勝者

・『Wリーグ SUPERGAMES～4GENERATIONS～』

2023年2月11日～12日、2月のWリーグ中断期間に女子バスケットボール4世代対抗戦がバスケットボール聖地の国立代々木第二体育館で開催された。

出場チーム 下記の4チーム

- ・W LEAGUE UNITED O26（Wリーグ選手26歳以上の選抜チーム：21名）
- ・W LEAGUE UNITED U25（Wリーグ選手25歳以下の選抜チーム：21名）
- ・U22女子日本代表チーム（FISUユニバーシティーズゲームズ出場選手：15名）
- ・U19女子日本代表チーム（FIBA U19女子ワールドカップ出場選手：15名）

対抗戦結果

優勝 W LEAGUE UNITED O26、準優勝 W LEAGUE UNITED U25
3位 U19女子日本代表チーム、4位 U22女子日本代表チーム

MVP

渡嘉敷 来夢（W LEAGUE UNITED O26－ ENEOS）

ベストプレイヤー

高田 真希（W LEAGUE UNITED O26－ デンソー）

山本 麻衣（W LEAGUE UNITED U25－ トヨタ自動車）

林 真帆（女子U22日本代表チーム－ 東京医療保健大）

都野 七海（女子U19日本代表チーム－ トヨタ紡織）

以上

【先人の軌跡】

— バスケットボール第2世代の人たち —

「昭和8年版 日本スポーツ人名辞典」（日本スポーツ協会版）

[歴史部]



「昭和8年版 日本スポーツ人名辞典 日本スポーツ協会版」には、1933年（昭8）当時、全国の高等師範学校、日本体育会体操学校、大学などの卒業生や現役で各種の競技を専門として活躍している人物の経歴が書かれています。その中から、バスケットボールを専門としている人物を抽出しました。

全国のYMCAでバスケットボールを経験した方々を第1世代とすると、学校の体育でバスケットボールを授業として受け、その後、指導者・役員・選手としてバスケットボール競技を全国に普及させた人たちは第2世代といえます。

【中学校時代にバスケットボールの授業を受けた世代】

「日本体育史」における大きな変革を経験した世代で、1913年（大2）文部省訓令第1号学校体操教授項目では球技の授業について「準抛する」と述べるというものでした。1926年（大15）5月27日に文部省訓令第22号を以て公布された「改正学校体操教授項目」においては、「球技の授業」を行うことを「準抛せよ」として、国の政策として要求度、強制度を高めています。

改正の要点として、新たに競技として「走技」「跳技」「投技」「球技」が加えられ、これによって中学校時代に「球技」の授業では、バスケットボール競技が行われるようになりました。従って、「遊戯」としてとらえられていた体操の概念が、「球技」として、より個人の競技性、専門性を追い求めるようになりました。

中学時代に体操の授業で「球技（バスケットボール）」を経験した生徒が、師範学校・体操学校・大学などに進学し、さらにその専門性を高めるべく努力したことは理解できます。

【体操が、競技として実施されるようになった背景】

この時代の文部省の政策の変化の背景には、大日本体育協会（1911年）創立に伴う各種競技団体の組織化と国際化の流れとがありました。極東選手権大会（1917年）、ベルリンオリンピック（1936年）参加などで、競技として「走技・跳技・投技」などの陸上と「球技」としてバスケットボールを対象に競技力を高める必要がありました。

このことが全国にバスケットボールを競技として広く普及させる契機ともなりました。

【選手・役員・指導者としてバスケットボールの普及に貢献】

この世代が選手・役員・指導者として、戦前から戦後にわたり日本のバスケット界を支えた世代であり、また、多くの卒業生は出身地にもどり、広く日本のバスケットボールの普及に貢献したと考えられます。

バスケットボール関係者は、合計 37 名収載されています。身長が 170 cm以上の人物のみ身長が記載されています。

(身長：170 cm未満 28 名、170 cm以上 7 名、185 cm 1 名、186 cm 1 名)

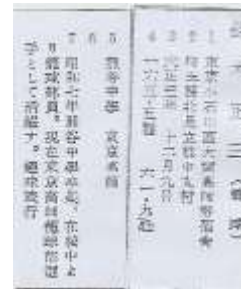
【学校別・指名・生年月日・出身地・出身校・身長・現在】

副島道正 明 4.10 大日本バスケットボール協会会長
貴族院議員



○東京高等師範学校（7名）

井上正喜 大 2.2.27 福岡県 朝倉中学 東京高師 文理大籠球部員
石山平作 大 2.6.26 岡山県 八掛中学 170 cm 東京高師籠球部員
池田光政 大 2.7.18 府立一中 東京高師籠球部員
佐々木久吉 大元.8.19 新潟県五泉町 村松中 173 cm 籠球部員
鈴木正三 大 3.12.9 埼玉県北足立郡中村町 熊谷中籠球部員
田中良夫 大 2.5.31 奈良県桜井町 畝傍中籠球部員
野村幸男 大元.10.18 京都府加佐郡西大浦村 明倫小 舞鶴中 185 cm 文理大籠球部員



○日本体育会体操学校（14名）

岩田富郎 大 2.7.11 福岡県 西南中学 籠球部主将
牛尾千年 大 3.9.24 西宮市池田町 伊丹中学 籠球部員
岡田一雄 明 42.7.4 和歌山県 粉河中学 176 cm 籠球部員
河上一人 大 3.5.5 熊本県天草郡 福岡中学 174 cm 籠球部員
木庭 新 大元.8.1 福岡県山門郡東山村 八女中学 籠球部員
高 禮源 明 45.5.27 京城第二公立高等普通学校 籠球部員
斎藤秀雄 大 3.1.8 朝鮮元山町 元山公立中 籠球部マネージャー
篠原惣作 大 3.6.12 香川県三豊郡 三豊中学 籠球部員
高澤智三郎 大 3.6.27 新潟本市町通り 6 番町 新潟中 籠球部員
中摩甲寅 大 3.1.31 鹿児島県加治木町 176 cm 籠球部員
中西五郎 大 3.1.15 佐賀県浜町 鹿島中 籠球部員
宮坂嘉三 大 3.6.28 長野県埴埴科郡埴生村 屋代中 籠球部員
山本精一郎 大 3.5.6 松山市木屋町 北豫中 籠球部員
興田 徹 明 45.7.8 福岡県 中学傳習館 170 cm 籠球部主将

○東京大学（1名）

藤井操一 明 35.12.22 福山市道三町 千葉中 松本高 太陽生命同社
運動部創立者 東都実業団籠球大会に活躍

○立教大学（5名）

浅野延州（秋）明 33.11.10 成城中学 東京電燈会社 大日本協会理事
内田春三郎 明 41.3.1 四谷第一小 成城中学 帝国ホテル
野村 瞳 明 37.4.25 東京神田区錦町 錦華小 京華中 近藤商店
松崎捷二 明 38.2.7 埼玉県大里郡梅沢村 鮫浜小 立教中 王子製紙



○早稲田大学（1名）

土肥一雄 明 39.4.3 兵庫県加東郡上福田村 関西学院 協会理事 常盤生命

○明治大学（3名）

日下部三紀 明 43.2.12 埼玉県南埼玉郡 横浜生命 YMCA 所属
鈴木西平（市）明 42. 奈良県角振新石町 巢鴨第一小 攻玉社中学
昭和7年主将 12月アメリカ遠征メンバー
鈴木彪平 大 3. 奈良市角振新石町 仰高小 攻玉社中 アメリカ遠征

○中央大学（1名）

木澤武男 明 43.4.10 栃木県栃木町 高千穂小 栃木商業 協会役員

○法政大学（1名）

水野隆久 明 41.2.14 本所区林町 中和小 大成中 YMCA イーグル

○高千穂高商（1名）

加藤一郎 明 41.1.12 山形県諏訪町 山形工業 帝国生命保険

○成城高校（4名）

清水作衛 大 3.10.12 長崎県 島原中学 成城学園高等科籠球部員
竹内徹二 大 3.4.17 前橋市本町 前橋中 成城学園籠球部員
中江孝男 大 2.4.30 京都市 泉小 成城高校 186 cm 籠球部員
平塚順二 大 4.1.21 渋谷区猿樂町 函館彌生小 173 cm 成城高校



卒業後の活動の実績を把握できる方もいますが、上記の人たちのその後の消息が分かりましたら、是非、振興会までお知らせください。

以上



嘘のような、本当にあった話

元高校教諭 須田 武志

私は、高校でバスケットボール部の顧問として、38年間、教員生活を送ってきました。38年間のバスケットボール部の指導の中で、なかなか信用してもらえない「嘘のような、本当の話」に何度か、遭遇しました。

かつて、1964年東京オリンピックのバスケットボールの監督をしていた吉井四郎氏が「バスケットボールには、神様がいる」ということをよく話しておられました。私の38年間の高校の教員生活の中においても、「私の教えているバスケットボール部には、神様がいる」というようなことを幾度も経験してきました。

コロナ禍の関係で、巣ごもりの状態の中、かつてのそのような場面を思い出しながら以下に書いてみたいと思います。

その1. 女子部員5人で3人が5反則で退場

当時の私の勤めていた高校は、男子と女子の生徒の割合が7対3で、圧倒的に男子の生徒の数が多かった。そういうことで、バスケットボール部の部員数にしても、女子の部員は、毎年ほぼ5人程度というのが通例であった。当時、私自身、まだまだ若かった(20代)こともあって、一人で男女のチームを見るだけの気力・体力は、十分持ち合わせていた。

女子部員は、5人の選手とマネージャー1人の計6人だけ。インターハイ予選が終わったの6月以降、夏休みに入る前から、5人のメンバーで、細々と練習を積み重ねてきた。そして迎えた11月の秋季高体連(新人戦)。一回戦から準々決勝の前までは、5人のメンバーだけで順調に駒を進めてきた。ベスト4に進出出来るかどうかという大切な準々決勝の試合で、このことは起きた。

私が教えている高校の女子バスケットボール部の部員は、はっきりいって、以前からリハビリの領域を出ない恥ずかしいチームであった。それに対して、今日の対戦相手の日野高校のメンバーは、中学時代に県で優勝し、近畿大会に出場していた時のメンバーがごっそり日野高校に入学しているから、正直いって、全く勝ち目がない。

いよいよ、ベスト4を争う秋季高体連(新人戦)の準々決勝の試合が始まった。会場は滋賀県立体育館。完成して間がない立派な体育館である。当時は、前後半20分ハーフのルールであった。前半残り5分で、早くも1人が5反則を犯して退場してしまった。そこでマネージャーに「オマエ、試合に出ないか?」と言ってみたが、「いやです」というすごい返事が返ってきた。結局、強豪、日野高校を相手に前半の終わりから、4人で試合を戦わなければならなくなった。即座にタイムアウトを請求し、作戦盤を使って、練習試合でやったことのない、4人で四角形を作ってゾーンディフェンス(ボックス)で守るように指示した。この時点で、8点リードしていた。

会員だより

前半が終わり、ハーフタイムも終わり、後半に入りしばらくすると、また、1人、5反則を犯してしまった。とうとう、3人で試合をせざるをえなくなった。この時点で、まだ7点リードしていた。タイムアウトを請求し、作戦盤を使って練習でやったことのない3人で正三角形を作ってゾーンディフェンスで守るよう、再び指示を出した。こちらは3人で相手は5人。3人对5人の試合となった。

幸か不幸か、相手のチームは前からあたらずに下がった状態で、しかもゾーンディフェンスで守ってくれたので大助かりであった。このあたりから、滋賀県立体育館内は騒然となった。2階にいる隣のコートの試合を見ていた観衆全てがこちらの試合を見るために移動してきた。現在のようにビデオカメラがあれば、その時の試合の様子がはっきり再現出来てよかったのだが…。残念ながら、当時はそんなものがないので、映像としての記録は残っていない。ただ、スコアブックだけは、何故か、未だに私の手元に残っている。この状況は、そう長く続かなかった。

そして、後半残り3分で、3人目が再び5反則を犯してしまった。とうとう、試合に必要な最少人数である2人になってしまった。2人になってしまうと面としてのゾーンディフェンスでは守れなくなってしまふ。2人で線で守るしか方法はない。もうこれで万事休すである。この時点で、まだ5点リードしていた。ところがである。ところがこちらが2人になってしまったのに、相手チームは依然として前からプレスディフェンスをすることなく、相変わらず、下がった状態でゾーンディフェンスで守ってくれた。それで、こちらとして大いに助かった。苦勞することもなく、2人でボールをバックコートからフロントコートまで運ぶことができたし、30秒（現在は24秒）を有効に使って攻めることができたから、大助かりであった。結局、試合が終わり、53対48の5点差で優勝候補である日野高校を破って勝利をおさめることができた。ベスト4である。

クラブチームなどの試合で、最後、2人になった試合のことは、ときどき耳にするが、高校生の公式戦の試合で、最後に2人となって尚且つ、上位チームに勝ったというのはこれが最初で最後ではなかろうか。彼女たちは能力もないし、キャリアもないし（5人のうち、素人が1人）、体力もないし、技術面においても相当劣るにも関わらず、何故か試合に勝つことができた。試合に勝った一番大きな理由の一つは、彼女たちが全員「負けず嫌い」の集合体だということだけである。公式戦となると彼女たちは、120～150%の力を発揮して試合に臨んでくるから叶わない。この「負けず嫌い」というものは、いくら指導者が教えても育つものではない。彼女たちが本校に入学してきたこと自体、既に他人は絶対負けたくないという強い自尊心の現れではなかろうか。これは指導者を遥かに超えた領域の話である。

1971（昭46）11月5日（金）秋季高体連 於 滋賀県立体育館
準々決勝 膳所高校 53対48 日野高校

〈次号に続く〉

	膳	所	高
監督	須田	武志	
コーチ	野崎	英雄	
マネ	三嶋	澄子	
4	4	堂口	浩子 160
5	5	北本	恒子 163
6	6	山本	睦子 158
7	7	住谷	珍子 165
8	8	河野	純子 158



スポーツと障がいのある人たち

— その5 —

上谷 富彦

パラ・スポーツ元年

2021年開催された「東京パラリンピック」は、わが国の「障がい者スポーツ」に大きな転機をもたらした。

162ヶ国、4400人の選手が競技したこの大会のテーマは「We are 15」、人口の15%は何らかの障がいをもっており、スポーツを通じ一般の人と障がいのある人が共生する社会を築いていこうとするものであった。大会前に「障がい者スポーツ」なくなる？

日本「パラスポーツへ呼称統一へ」という記事が毎日新聞夕刊（2021. 4. 20）のトップ記事となった。当時は、パラリンピック＝身体障害・知的障害（一部）偏重ではないかと批判もあり、本当に定着するかは、まだ疑問であった。IOCが認めた国際的障害者大会には「デフリンピック」（聴覚障害）と「スペシャルオリンピクス」（知的障害）などがあるからである。

元来、「パラリンピック」は、下半身まひを意味する「パラプレジア」で1964年オリンピック東京大会から使用されていたが、次第にオリンピックの「もう一つ」を意味する「パラレル」を解釈されるようにならなってきた。

東京都は、今般「生活・文化スポーツ局」をつくり、その中に「パラスポーツ課」を設置した。行政が、障がいのある人達とない人達がお互い助け合い共生する社会への取り組みをスタートさせたのだ。「パラスポーツ」普及のための展開をする企業から都の職員に転出するという33歳の女性の記事も目に付いた（2022. 11. 9 毎日）。東京都の23区においても「パラスポーツ」への積極的取組みが行われるようになってきた。

知的障害者を対象とした国際的組織として「スペシャルオリンピクス」（以下SO）がある。知的障害者スポーツ大会の正式呼称として「SO」が認められたのは、1988年当時IOCのサマランチ会長とSO代表のユニスシュライバー（以下ユニス）が合意書に署名した時からである。

ケネディ家の一人、ユニスの姉ローズマリーが発達障害であることは、公式には、発表していなかった。兄ジョン・F・ケネディが大統領に就任した直後「知的障害と闘うための総合的かつ遠大な国家計画を策定する」と発表した。これを受けてユニスは「サタデイ・イブニングポスト」誌に「知的発達障害児に希望を」と題して記事を書いている（1962. 9. 22）。

「目の不自由な人には、ヘレン・ケラーがいる。耳の不自由な人には、ベートーベンがいる。彼らもハンディキャップを抱えていたが、彼らは自ら主張することができた。それに反して知的発達障害の人は、自らの業績や才能や悩みを世間に示すことができない、したがって知的発達障害のある人の価値を擁護するのは、健常者の務めである。彼らと共に過ごし、彼らの価値を知り、彼らを愛することは我々の義務である。何故なら彼らが我々

会員だより

を必要としていることを知っているからである。我々は彼らがかぎす炎を我々の手で支えてあげねばならない。何故なら、我々は、知的発達障害のある人によって温かい心に触れ、心安らぐ喜びを彼らから得るからである。その意味で、知的発達障害のある人は我々の道しるべといえる。」（「スペシャルオリンピクス」集英社新書/遠藤雅子著 P78）

新しく日本パラスポーツ協会会長に就任された森和之氏は、スポーツを通じて社会が「障害を知る」から「深く理解する」へ進めたいと述べている（毎日新聞 1/30）。

SO 日本では、2022 年 11 月 4 日から広島で全国大会を開催した。コロナ禍で大変難しい状況ではあったが無事大会を終えることができた。特に目立ったのはファミリーの積極的な参加であった。単に大会に参加することでなく、SO 活動の本質をよく理解し参加したアスリート達が十分に実力を発揮し成長する場を築き上げてくれた。そして、今後「パラスポーツ」の普及に SO の活動が大きな力となることを証明してくれた。「パラスポーツ」元年にふさわしい活動であった。

コロナ禍で厳しい状況ではあるが、「SO」の原点をより多くの人たちに理解していただき、行政と協力して「パラスポーツ」を定着させていきたいと考えている。

アスリート (知的障害のある人) の自立と社会参加を応援します

すごい選手を育てることや、金メダリストを決めることが目的ではありません。知的障害のある人が、スポーツを通じていろいろな人と接することで、自立した社会人として成長していくこと。そして、障害のある人とない人が互いに助け合う「インクルージョン (包み込む) 社会」をつくり出すこと。それがスペシャルオリンピクスの目標です。

以上

書籍紹介

「社会を変えるスポーツイノベーション」

～2つのプロリーグ経営と100のクラブに足を運んでつかんだ
これからのスポーツビジネスの神髄～

大河正明著 大阪成蹊大学スポーツイノベーション研究所編



副理事長 佐々木政治



1. はじめに

大河正明さんが表題の本を出版されたのでご紹介したい。

大河さんは、当日本バスケットボール振興会の2015年秋季講演会で講演いただいたので、ご存じの会員も多いのではないかと思います。

講演会当時の2015年は、翌年のBリーグ開幕を迎え、JBA専務理事兼事務総長、Bリーグチェアマンとして『スポーツ界に関わることで通算12年。一番思い出に残る時期は、B.LEAGUE開幕前の1年6か月でしょうか。文字通りの小所帯、産みの苦しみと期限に追われる中で、……』（本書のおわりから抜粋）の多忙かつ大変な時期でした。大河さんには、このような大変な時期に講演いただいたこと、そして現在のバスケットボール界の発展に寄与いただいたことに改めて感謝申し上げます。

本書副題にある通り、サッカーのJリーグ、バスケットボールのB.LEAGUEと、2つのプロリーグの厳しい経営環境を克服し、現在の興隆につなげた功績は大いに賞賛されてしかるべきものであるといえましょう。

ただし、本書はこれらの単なる成功物語ではなく、大河さんがスポーツ界の発展に貢献する最後の仕事として、人材育成を実践するために開講した「スポーツイノベーションアカデミー」の講義録として刊行されたとのことであり、サッカー、バスケットボールの関係者だけでなくスポーツ関係者の皆さん全員にぜひご一読をお勧めします。

（大河正明さんの主な経歴）

大河正明（おおかわ まさあき）

1958年5月31日生まれ 京都府出身

1981年3月 京都大学法学部卒業

1981年4月 株式会社三菱銀行（現株式会社三菱UFJ銀行）入行

1995年5月～1997年6月

社団法人（現公益社団法人）日本プロサッカーリーグ出向

2010年10月 株式会社三菱東京UFJ銀行（現株式会社三菱UFJ銀行）退行

2010年11月 社団法人（現公益社団法人）日本プロサッカーリーグ入社

2014年1月	社団法人（現公益社団法人）日本プロサッカーリーグ常務理事
2015年4月	一般社団法人（現公益社団法人）ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ理事
2015年5月	公益財団法人日本バスケットボール協会専務理事兼事務総長
2015年9月	一般社団法人（現公益社団法人）ジャパン・プロフェッショナル・バスケットボールリーグ理事長（B.LEAGUE チェアマン）
2016年6月	公益財団法人日本バスケットボール協会副会長
2019年6月	公益財団法人日本オリンピック委員会理事
2020年7月	びわこ成蹊スポーツ大学副学長 大阪成蹊大学スポーツイノベーション研究所所長
2021年10月	びわこ成蹊スポーツ大学学長

2. 本書のコンテンツ

本書は6つのCHAPTERから構成されている。各CHAPTERの表題と重要なキーセンテンスは次のとおりです。

CHAPTER	表題	キーセンテンス
1	人事・組織ガバナンス	「ガバナンス」こそがスポーツ界発展のための最重要課題
2	リーグ・クラブ経営戦略	明確なビジョン、定量的目標で組織を動かす
3	マーケティングⅠ ソフト・ハード一体経営	日本のスタジアム・アリーナはまだ二流
4	マーケティングⅡ デジタルマーケティング とメディアカンパニー	デジタルマーケティングへの取り組みの遅れは致命傷
5	財務・ファイナンス	クラブライセンス制度導入に伴う健全経営の促進
6	スポーツ界発展のために	人が第一、戦略は二の次

こうした点を具体的にバスケットボール界に当てはめて、本書の内容をまとめてみます。まず、問題を整理してみます。

2000年過ぎたころから「理事会」と「並立する男子の二つのトップリーグ」の問題が生じ、混迷を深めます。特に象徴的なのは2006年の世界選手権開催による13億円の大赤字とその事後処理後の混迷です。その後東京オリンピック開催も決まり、こうした事態解消が急務となったのですが解決に至らず、FIBAから、JBAのガバナンスの確立、男子トップリーグ併存状態の解消、男子日本チームの強化という3点の要求を突き付けられ、要求がクリアできなければ国際大会に出場できないという制裁が加えられました。

結局回答期限までに解決に至らず制裁が発動されました。このあたりの経緯はバスケット関係者の皆さんは周知のことでしょう。

この改革のためのタスクフォースを川淵会長と大河さんが担当されたということです。改革の要点を項目ごとにまとめてみます。

項目	改革の要点
人事・組織ガバナンス	経営と執行の分離、JBA ガバナンスの再構築 中期経営計画 JBA100周年に向けた「JAPAN BASKETBALL STANDARD2016」ロードマップ公表
リーグ・クラブ経営戦略	下記マーケティング戦略に加え 地域創生×バスケットファミリーの拡大
マーケティングⅠ ソフト・ハードの一体経営	スタジアムアリーナの改革
マーケティングⅡ デジタルマーケティング	デジタルマーケティングの強化（集客施策の強化） メディアカンパニー（双方向型メディア等） アジア戦略
財務・ファイナンス	クラブライセンス制度の導入による健全経営
スポーツ界の発展のために	経営の3要素（組織の3要素「ミッション」「ビジョン」「バリュー」）の明示 人材育成

紙幅に限りがあり、要点だけに留めざるを得ませんが、こうした改革がスタートして2025年で約10年が経過します。「2016日本再興戦略名目GDP600兆円に向けたプロジェクト戦略10」では、スポーツの場合2015年に5.5兆円といわれる規模から2025年には15.2兆円（約2.8倍）に増やしていくという具体的な目標が掲げられており、バスケットボール産業が果たしてどのレベルまで成長を遂げるのか注目したいと考えています。

3. 最後に

経営目的・理念、ガバナンス、マーケティング、財務という要素は、どの経営体にとっても必要不可欠な重要な要素であり、スポーツ事業に限らずある事業が停滞や衰退を招き、時には不祥事の発生により存続自体が危ぶまれることの発生は、こうした要素が欠落あるいは十分機能していなかったことの反映であるといえましょう。

本書帯に記された

『現場百回を信条に、Jリーグ+B.LEAGUE、2つのプロリーグ経営を担い12年間で培ったスポーツビジネスの本質と極意の全てをこの本に集めました。

スポーツビジネス学に必要な解やヒントは、必ずこのなかにあると思います。

本書を読んでいただき、さらにスポーツに興味関心を持つかたが増えることを願ってやみません。』

という大河さんの思いが、今後のスポーツ界を担う人材に受け継がれ、まさにスポーツが「心を動かす、未来を創る、社会を変える！」ことを期待したいと思います。

なお、現在、主に中学・高校の職場はいわゆるブラック企業とも揶揄され、教員は多忙を極め精神を病む割合も少なくないことが報告されています。特に部活動の顧問を担当した場合はより深刻となることが指摘されています。

こうした問題の解決策の一つとしてスポーツ部活動の地域移行も検討されています。

大河さんも本書で課題の一つとして指摘されていますが、これまでの経験・知見を活かし今後の具体的方策につき改めて提言いただければと願っています。以上

高校籠球ふるさと記（新潟県編）

[事務局]

戦後、昭和時代の新潟県のバスケットボールと言えば、男子では北越商業高校、三条高校、新発田商工高校、女子では高田北城高校、バスケット人であれば各校の全国レベルでの活躍を知らない人はいない。具体的には、北越商業がインターハイ優勝1回、国体準優勝1回、三条がインターハイ優勝4回、準優勝1回、国体優勝1回、準優勝1回、新発田商工がインターハイ準優勝1回、国体優勝1回、高田北城がインターハイ優勝1回、準優勝1回、国体優勝1回、準優勝3回。これらの輝かしい戦績の背景には、戦前の昭和時代の同県の輝かしい歴史があり、その存在を忘れてはならない。やや長くなるが、まずは、それに触れておきたい。

戦前の第一次黄金期：(1927年—35年)

30年の極東オリンピックに新潟師範の小林正一が中等学校からただ一人、日本代表に選ばれている。それは、新潟師範の当時の強さと新潟県の層の厚さやレベルの高さを物語っている。

以下、当時の戦績を箇条書で記す。

明治神宮国民体育大会（以下、神宮大会と略称）

33年：新津高女クラブが優勝（24、26年にも優勝）

全国男子中等学校選手権大会（以下、全男中大会と略称）

27年：新潟師範が優勝（26年も優勝）

29年：2部（師範学校）で新潟師範が優勝

30年：1部で新潟商業が、2部で新潟師範がそれぞれ優勝

31年：1部で長岡商業が優勝

32年：1部で新潟商業が優勝、（同年、新潟県籠球連盟設立）

33年：3部（実業学校）で新潟商業が優勝

34年：2部で新潟師範、3部で新潟商業がそれぞれ優勝

35年：1部で新潟中学、2部で新潟師範がそれぞれ優勝

その他

35年：第6回女子全日本総合選手権大会で新津高女クラブが優勝



戦前の第二次黄金期：(1936年—38年)

36年にベルリンで開催の第11回オリンピック大会に新潟商業出身の横山堅七と吉井精三郎が代表に選ばれている。その後、横山は早稲田大に、吉井は新潟師範から東京高等師範学校に進み、活躍した。因みに横山は37年度の最優秀選手に選ばれている。

神宮大会：新潟師範が優勝

全男中大会

36年：2部で新潟師範が優勝、3連覇の偉業を達成。

（後に日本を代表する名指導者となった吉井四郎も優勝メンバーのひとり）

37年：2部で新潟師範が優勝、神宮大会でも優勝という偉業を達成。

3部で長岡工業が初優勝

38年：2部で新潟師範が優勝、5連覇の偉業を達成。
3部で長岡工業が優勝、2連覇を達成。

戦前の第三次黄金期：(1939年—42年)

特に39年は籠球王国新潟の戦前の黄金の年といえよう。全日本総合選手権後の優秀選手選考会で新潟商業OBの横山堅七が2度目の最優秀選手に、女子では新潟高女の小野幸が最優秀選手に、同じく布施雅子が優秀選手に、新津高女の荒川きみが優秀選手にそれぞれ選ばれている。同年、新京で開催のアジア大会には、川上左武郎（長岡中—慶応大）、吉井四郎（新潟商業—師範—東京高師）、笠原左右一（柏崎中—立教大）が選ばれ、日本チームの完全優勝の原動力として活躍した。40年の優秀選手の選考では、横山堅七が3度目の、小野幸が2度目の最優秀選手に、新潟高女の布施雅子、山本多美枝が優秀選手に選ばれている。41年の全日本女子選手権大会終了後の優秀選手の発表では、横山堅七が4度目の、笠原左右一、吉井四郎がそれぞれ初めて、最優秀選手に選ばれている。

女子では、小野幸が3度目の最優秀選手に、また新潟高女の布施雅子が3度目の、山本多美枝が2度目の優秀選手に選ばれている。

全男中大会

39年：1部で新潟中学、2部で新潟師範、3部で新潟商業がそれぞれ優勝、新潟勢が3部門独占優勝を果たした。

40年：2部で新潟師範が優勝、7連覇を達成。

42年：前年中止となった大会（全国学徒教員体育大会と改称）で中等学校の部で長岡商業が、2度目の優勝を飾った。

師範の部では新潟師範が優勝、8連覇という偉業を成し遂げた。

その他

40年：第10回女子全日本総合選手権大会で、新潟高女が優勝

42年：全国高等工業学校大会で長岡高等工業が優勝

横山堅七のこと

新潟商業で華々しい活躍をした横山は、早稲田大に進学、戦後47年に開催の第1回全日本選手権に新潟クラブのメンバーとして八谷、吉井、長谷部らとともに参戦、決勝で東京大を破り、戦前の“籠球王国新潟”の名を戦後も改めて強く印象付けた。日本鋼管に就職後、48年には高橋修（弟）と山岸を新潟から誘い入れ、更には第1回アジア競技大会の日本代表であった高橋実（兄）（新潟商—明治大）も加入することで日本鋼管の94連勝がスタートするが、横山は、まさにそのパイオニアであった。

このような歴史と伝統を誇る新潟県のバスケットであるが、本誌では1948年（昭和23年）から1988年（昭和63年）迄を対象に、その間、県内で活躍した高校や選手、コーチ・指導者に焦点を当て、新潟県の高校バスケット界を通観してみた。内容的には新潟県バスケットボール協会創立80周年記念誌「躍動そして未来へ」の他、客観的な資料に依拠し、まとめたつもりであるが、抜けや思い違いがあるかもしれない点、読者の皆様からのご指摘をお待ちしたい。（なお、個人名は敬称略、女性は旧姓、選手の卒業校名の後の数字は西暦卒年、高校名は原則略称）

先ずは、男子であるが、大きくは5つの期間に分けることができる。

第一期（1948年—56年）

インターハイ（52、56年は2校、53年は3校出場）には、三条が7回、北越商が3回、三条実、新潟工、新発田商工が各1回出場。三条が48年にベスト8、52年に優勝、53年に第3位、54年に準優勝、55年に優勝、56年にベスト8、北越商が51年に優勝、三条実が53年にベスト8、新発田商工が56年に準優勝。国体では51年に北越商が準優勝、三条が52年に第3位、55年に優勝、新発田商工が56年に優勝。この期における新潟県勢の全国レベルでの活躍は、特筆、賞賛に値する。

因みに、52年から56年の全国高校男子ランキングには、新潟県勢が以下の通り、上位で顔を出している。

52年：三条（第2位）、53年：三条（第3位）、三条実（第8位）、54年：三条（第2位）、55年：三条（第1位）、56年：新発田商工（第2位）、三条（第5位）

この時期の著名選手としては、今泉健一（北越商51—明治大—日本鉱業：明治大2年時に全日本メンバーに選出、メルボルン、ローマオリンピック大会日本代表）、金川英雄（三条55—立教大—八幡製鉄：ローマオリンピック大会日本代表）、兼田孝夫（新発田商工56—明治大—松下電器：ユニバーシアード、アジア大会日本代表、東京オリンピック最終候補）、横山房雄（三条56—立教大—八幡製鉄：60年の第1回アジア選手権日本代表、ローマ、東京オリンピック最終候補、日本協会理事時代に全国家庭婦人連盟設立に貢献、中学生のレベルアップにも尽力した）、諏訪俊二（三条56—慶応大—三井生命）、田中正夫（三条56—東京教育大—日本鋼管）がいる。

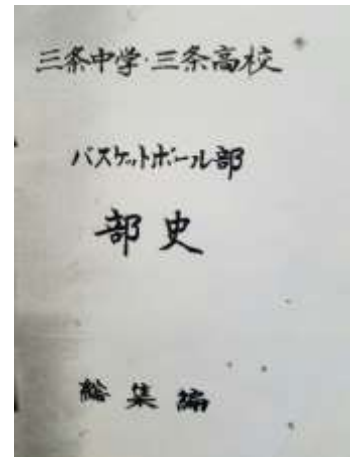
彼ら三条56年卒業組の横山、諏訪、田中は、闘将、中村コーチの厳しい指導のもと、下級生時に苦杯を喫した宿敵の武蔵、当時、理論派の第一人者である畑龍雄率いる武蔵との壮絶な戦い（インターハイ、国体ともに2点差で勝利）を制し、優勝の栄冠を勝ち取った。あと、大島康邦（新潟南57—立教大—日本鉱業：大学4年時にローマオリンピック日本代表、61年ユニバーシアード大会、62年アジア大会日本代表、日本鉱業では中心選手としてオールジャパン4連覇に貢献）がいる。

この時期、活躍した選手では、久住、相馬、星、遠藤（ともに三条49）、弦巻、戸石（ともに新潟工49—日本鋼管）、阿部（新潟51—早大—鉄興社—早大院）、庭野（旧姓泉）（北越商52—明治大—日本鉱業）、松原、大西、林（ともに北越商52）、折戸、坂口（ともに新潟商—日本鋼管）、清野（新発田商工—日本鋼管）、本間、山田、清治（ともに新発田商工—製鉄化学）、齋藤、相馬（ともに新発田商工—住友金属）、木山（長岡商—日本鉱業）、林（北越商52—明治大）、田中（三条53—明治大—松下電器）、吉田（藤）、阿部、小田（ともに三条53）、植松、栗山、高橋（ともに新潟商53）、珊瑚（新潟工53）、鶴川（北越商53）、新井田（新発田商工53）、高橋（新潟53—明治大）、吉田（研）、渡辺（正）（ともに三条54）、渡辺（英）（三条55）、戸石、佐藤、岡（ともに新潟工54）、長谷川（長岡商54）、野本（新潟商54）、岡山（三条実54）、丸山（北越商55—明治大—ヤシカ：県協会理事長）、滝沢（三条57）、捧（三条57—明治大）、坂井（三条57—日立電線）らがいる。

第二期（1957年—66年）

三条が強さを誇り、インターハイ（63、64、66年は2校、65年は3校出場）に8回出場、63、64年の連続優勝は特筆、賞賛に値する。因みに三条は国体にも7回出場し、64年に準優勝、62、63、65、66年に第3位と、これも賞賛に値する。三条に次ぐのが新潟商でインターハイに3回出場している。あとは長岡商、新潟南、村上が各1回出場している。

この時期の著名選手としては、安中亮二、布施征之（ともに三条 62—明治大：インカレ優勝—松下電器：第1回日本リーグ優勝）、浦沢良雄（三条 64—日立電線）、金子邦一（三条 64—明治大）、相場金太郎（三条 65—慶応大）、峰島和夫（三条 65—日大）、樋渡和義（三条 65—明治大—大和証券）、堀秀雄（三条 65—明治大—豊田通商）がいる。64年、65年卒業組は、当時、超弩級と言われた谷口を擁する攻撃力の中大付属に対し、固いディフェンスとスピードを誇る三条が快勝した時の主要メンバーである。65年卒業組は63年秋の国体準決勝、翌64年春季国体決勝戦と2回連続で苦杯を喫した相手、松江工を夏の静岡インターハイで破り、2年連続優勝の偉業を成し遂げた時の主要メンバーである。



この時期、活躍した選手では、鈴木（三条 58—拓殖大：同学バスケット部創設に尽力）、橋本（北越商 60—亜細亜大）、浜松（新潟商 60—法政大）、小泉（六日市 60—東京教育大：県協会副会長）、永井（新潟商 61—法政大）、山賀（高田商 61—日立）、村山（十日町 61—亜細亜大）、水科（三条 62）、荒井、峯島（ともに三条 62—芝浦工大）、横山（新潟商 62—法政大）、上村（六日町 62—東京教育大：県教員、県協会会長）、小宮（長岡 63—法政大）、諸林（新津 63—順天堂大）、稲田（新潟商 64—専修大）、桑野、坂田（ともに新潟商 64）、関川（佐渡 64—順天堂大）、宮沢（十日町 64—東経大）、木村、大矢、松永（ともに三条 65）、関根（三条 65—明治大）、藤島（三条 65—国学院大）、清水（高田 65—大商大）、小林（柏崎 65—早稲田大）、小戸田（新潟商 65）、新木、石山、亀山、片岡、（ともに三条 66）伊藤（三条 66—専修大）、島田（新潟南 66—関西大）、本間（新潟南 66—芝工大）、清野（新潟南 66—明治大）、白崎（三条 67）、小島（新潟南 67—法政大）、太田、川崎（ともに新潟南 67—芝工大）、山崎（柏崎 67—芝工大）、今井（糸魚川商工 67—立正大）らがいる。

第三期（1967年—73年）

前半は三条と高田工が、後半は高田工と新潟が活躍。インターハイ（67、69、70、73年は2校出場）には高田工が5回、三条が3回、新潟が2回、新津工が1回、それぞれ出場している。67年に三条がベスト8入りしている。

この時期の著名選手としては、土田真嗣（三条 68—明治大—新日鉄：70年ユニバーシアード日本代表）、馬場敏春（北越商 74—法政大—三井生命：大学時に日本一、77年ユニバーシアード、82年アジア大会日本代表、NBAGリーグで活躍の馬場雄大選手の父）がいる。

この時期、活躍した選手では、金川、桑原、上野（ともに三条 68）、計良（佐渡 68—順天堂大）、増田（高田 68—大体大）、小山（長岡工 68—明治大）、富山（北越商 69—大東文化大）、関口（新発田 69—拓殖大）、田中（両津 69—国士館大）、花沢（三条 69—国学院大）、明道（三条 69—明治大）、林（新潟南 69—明学大）、中沢（三条 70—明治大—三井生命）、

斎藤（三条 70－拓殖大－大和証券）、三浦（糸魚川 70－中京大－日本鋳業）、金藤（明訓 70－京産大）、小沢（新潟南 70－法政大）、稲垣、大川戸（ともに中越 70－亜細亜大）吉川（新潟巻 70－国学院大）、小出（佐渡 71－順天堂大）、小林（中越 71－亜細亜大）、田村（新潟巻 71－国学院大）、梅川（新潟 72－慶応大－東京海上）、塚野（三条 72－拓殖大）、神田（明訓 72－東洋大）、岡村（明訓 72－拓殖大）、市川（長岡商 72－亜細亜大）、斎藤（新潟栃尾 72－拓殖大）、和倉（相川 73－関東学院大）、川口、川崎（ともに明訓 73－東洋大）、武田（高田工 73－駒沢大）、小林（新潟南 73－専修大）、風間（高田工 74－法政大）、大沼（新潟南 74－東海大）、金子（明訓 74－東洋大）、大原（明訓 74－東農大）、保坂（十日町 74－早稲田大）らがいる。

第四期（1974 年－80 年）

白山の台頭が目立ち、インターハイ（2 校出場）に 5 回出場し、74 年と 76 年にベスト 8 入りしているのは特筆に値する。この間、古豪の三条が 75 年のインターハイで第 3 位、同じく古豪の新潟商が 79 年、80 年の両年、ベスト 4 入りしているのは、特筆、賞賛に値する。以上のほか、新潟南が 3 回、新潟が 2 回、北越商が 1 回出場している。

この時期の著名選手としては、陸川章（新井 80－日体大－日本鋼管：中学時代は陸上競技でバスケットは高校から。負けず嫌いの性格で徐々に頭角を現し、大学 3 年次に関東学生で得点王になり、全日本メンバー入り。東海大監督）がいる。

この時期、活躍した選手では、外山（三条 75－明治大－東芝）、石井（新津 75－筑波大：県教員、県協会理事長）、品田（柏崎 75－日体大：東京都教員、全国高体連副部長、日本協会理事）、本間（佐渡 75－拓殖大）、小菅、坂井（ともに白山 75－東洋大）、木下（白山 75－東京経済大）、建部（糸魚川 75－東京経済大）、長谷川（白山 75－拓殖大－熊谷組）、高橋（長岡工 75－明治学院大：全国高体連副部長、日本協会理事）、谷（三条 76－専修大）、山田（三条 76－日体大）、土田（三条 76－青学大）、斎藤（三条 76－筑波大）、深川（中越 76－亜細亜大）、高沢（新発田商工 76－筑波大－東芝－新潟経営大準教授・監督）、竹中（北越商 76－東洋大）、久保田（糸魚川 76－順天堂大）、星（明訓 76－駒沢大）らがいる。

続いて、徳橋（中越 77－亜細亜大）、中山（白山 77－拓殖大）、熊木（柏崎 77－京大－丸紅）、松田（高田北城 78－日体大－熊谷組）、松風、曾武川（ともに高田北城 78）、長谷川（白山 78－明治大）、皆川、荒木、古俣（ともに白山 78）、本間（新潟商 78－日体大）、五十嵐（新潟商 78－東農大）、阿部（新潟商 78）、磯田（柏崎 78－芝工大）、栗山（新潟 78－明治大）、塚野、佐藤、山田（ともに新潟 78）、青木、佐藤、角田（ともに新津工 78）、小林（三条 78）、皆川（新潟巻 78）、高沢（高田工 78）、小林（透）（新潟商業 79－順天堂大）、上杉、宮川（ともに白山 79－順天堂大）、小野寺、林、村木、小山（ともに白山 79）、石川、里村、萩野、今井（ともに新潟南 79）、沢栗（新潟工 79）、小林（茂）（直江津 79－亜細亜大）、藤田（明訓 79－東農大）、渡辺（新潟商 79－専修大）らがいる。

更に、桑山（柏崎 80－東農大）、平松（新潟商 80－法政大）、阿部（新潟南 80－東洋大）、柏木（新潟南 80－早稲田大）、三島（新潟商業 80－専修大）、桜井（新潟商業 80－駒沢大）、小野塚（新潟南 80－神奈川大－丸紅）、斎藤（新潟商 80－駒沢大）、三宅、白井（ともに新潟商 80）、武藤、坂井（ともに新潟南 80）、佐藤（堀之内 80）、江向（新井 80）、丸山（白根 80）、坂上（北越商 81－東洋大）、石田（白山 81－専修大）、五十嵐（良）（白山 81－順天堂大）、藤田、小林、長野（ともに白山 81）、宮沢（新潟商 81－駒沢大）、佐藤、五十嵐（孝）、二瓶（ともに新潟商 81）、伊狩（白山 81－東洋大）、成田（新潟南 81－専修大）、遠

藤（柏崎工 81）、本田（新潟工 81）、竹俣（新発田商工 81）らがいる。

第五期（1981 年—88 年）

インターハイ（2 校出場）には新潟工が 5 回出場し、82 年にはベスト 8、88 年には第 3 位、87 年のウィンターカップで第 3 位と特筆、賞賛に値する成績を残している。これに次ぐのが、新潟商で 4 回、新潟南と北越商（北越）が各 3 回、高田工が 1 回出場している。

この時期の著名選手としては、祐木毅（新潟南 87—筑波大—熊谷組：94 年アジア大会、98 年世界選手権日本代表）がいる。

この時期、活躍した選手では、安田（白山 82—東洋大）、森本（北越商 82—東洋大）、浅見（新潟商 82—大東文化大）、大石（北越商 82—専修大—新日鉄）、鶴巻（北越商 82）、三戸（新潟商 82—東農大）、小林（新津 82—順天堂大）、長谷川（白山 82—順天堂大）、多田、堀井、伊藤（ともに白山 82）、野沢（新潟南 82—駒沢大）、青海（新潟工 82）、梅田（新潟巻 82）、武藤（新潟工 83—順天堂大）、丸山（新潟工 83—明治大）、佐藤、山田（真）、山田（敬）（ともに新潟工 83）、風間（慶）（新潟商 83—大東文化大）、杉原、阿部、永井（ともに新潟商 83）、松谷（柏崎工 83）、高橋（六日町 83）、大村（中越 83）、丘山（長岡 83—順天堂大）、高沢（新発田 83—筑波大—本丸中教員）、渡辺（北越商 84—東洋大）、中村、小林、横山（ともに北越商 84）、中村、大滝、高木、松井（ともに新潟商 84）、田村、田辺、赤川（ともに新潟工 84）らがいる。

続いて、高橋（新潟東 85—駒沢大—豊田通商）、池田、本多、山本（ともに高田工 85）、計良、白川（ともに新潟南 85）、丸山、坂井（ともに北越 85）、中野（新潟 85）、渡辺（新潟工 85）、斎藤（新潟巻 85）、山口（新潟商 85）、亀山（敬和学園 86—大東文化大—マツダオート）、風間（健）（新潟南 86—法政大）、玉川（新潟南 86）、中屋（北越 86—日体大）、高崎（北越 86）、浦上（新潟工 86—順天堂大—住友金属）、松井（新潟工 86—日体大）、圓山、渡辺、佐藤（ともに新潟工 86）、阿部、富樫（美）（ともに新潟商 86）、本村（中越 86）、石上（六日町 86）、富樫（隆）（新潟商 87—東農大）、大滝（新潟商 87—駒沢大）、三富（新潟商 87）、山田（明）（新潟工 87—駒沢大）、仁瓶、神田（ともに新潟工 87）、中川（新潟南 87）、藤田（北越 87）、野田（長岡工 87）、伊藤（両津 87—日体大）、小林（新潟工 87—日体大）らがいる。

更に、北見（佐渡 87—日体大）、渋谷（新潟南 88—京産大）、本間（村上 88—筑波大—住友金属）、北村（新潟商 88—日大—アンフィニ東京）、藤田、富樫（泰）、平原（ともに新潟商 88）、佐藤（均）（新潟工 88—中央大）、渡辺、水倉（ともに新潟工 88—法政大）、伊藤（新潟工 88）、千原（柏崎工 88—東海大）、神蔵（両津 88）、村越（新潟工 89—日体大—日本鋳業）、井部（高田工 89—日本大—三井生命）、星（北越 89—大東文化大）、今井（新潟工 89—法政大）、田中（新潟工 89—駒沢大）、佐藤（俊）（新潟工 89）、山田（啓）（北越 89—筑波大—大和証券）、西巻、新木（ともに北越 89）、早川（新潟南 89）、北村（新潟商 89）、本多（高田工 89—日大）、城ヶ崎（新潟工 89—東農大）、矢尾板（新潟工 90）、難波（北越 90）らがいる。

次に女子であるが、大きくは 6 つの期間に分けることが出来る。

第一期（1948 年—53 年）

新潟中央（48、49 年は校名が新潟女高）が強く、後半からは新津も台頭。インターハイ

(53年は2校出場)には新潟中央が5回、新津が2回出場している。51年国体での新津のベスト8入りは、特筆に値する。

第二期(1954年—61年)

インターハイには三条東が、新潟中央が出場の56年を除き、連続7回出場している。55年インターハイでのベスト8入りは特筆に値する。

この時期、活躍した選手では、山井、斎藤(ともに三条東62—安城学園短大)阿部(新潟中央62—日体大)、谷沢(八日市62—東女体大)らがいる。

第三期(1962年—72年)

高田北城が圧倒的な強さを誇り、インターハイ(63年、66年は2校出場)には11回連続出場している。インターハイでの64年の準優勝、65年の優勝は特筆、賞賛に値する。67年、68年にもベスト8入りしており、これも特筆に値する。国体では、64年に優勝、63、66、71年に準優勝、67年に第3位と素晴らしい戦績を残しており、いずれも特筆、賞賛に値する。高田北城以外では2校出場の63年に新潟中央が、66年には第二長岡がそれぞれ出場している。

この時期の著名選手としては、黒田洋子(高田北城66—日体大:ユニバーシアード、アジア選手権、世界選手権日本代表)、黒田幸子(高田北城68—日体大—シャンソン:世界選手権、アジア選手権日本代表)がいる。

この時期、活躍した選手では、鶴巻(高田北城65—安城学園短大)、豊川(高田北城66—東芝—安城学園短大)、東条(高田北城66—興銀)、南(高田北城67—日体大)、小川(高田北城69—三井生命)、小林(綾)(高田北城72—シャンソン)、長原(高田女子73—日立甲府)、炭田(高田商73—日立甲府:同チーム・アシスタントコーチ)らがいる。

第四期(1973年—74年)

インターハイ(74年は2校出場)には高田女子が2回、74年に新津が出場している。

この時期、活躍した選手では、縄(高田女子75—日立甲府)らがいる。

第五期(1975—80年)

前半は、新潟中央と新潟商が、後半は新潟商と沼垂がそれぞれ競い合っていた。インターハイ(2校出場)には新潟商が5回、新潟中央と沼垂が各3回、糸魚川が1回出場している。

この時期、活躍した選手では 大竹(長岡大手76—日体大)、大槻(新潟中央77—東女体大)、横山(新発田77—東京学芸大)、駒村(長岡女77—日立甲府)、種村、石渡(ともに新潟商78)、田中、飯田、武田、羽貝(ともに新潟中央78)、桜沢、堀川、加藤、馬場(ともに沼垂78)、近藤、鈴木(ともに水原78)、川上(長岡女78)、小日向(安塚78)、川崎、滝沢、河野(ともに新潟商79)、阿部(北越商79—第一勧銀)、小野(新潟江南79)、鈴木(長岡女79)、八木(長岡大手79)、小林(新津79—日女体大)、辰口(柏崎79)、藩(沼垂79)、坂上(新潟中央79)、永井(新潟江南79—東女体大)、平(新潟商80—三井生命)、佐藤(新潟商80—東女体大)、本間(新潟商80)、市村、中部、西村(ともに沼垂80)、小林(新潟中央80)、永野、鈴木(ともに高田北城80)、石塚(安塚80)、坂井、逢坂、石塚(ともに新潟商81)、小林(弘)、武藤(ともに沼垂81)、杉山(新潟中央81)、小林(禎)(五泉81)、佐藤(高田商81)らがいる。

第六期（1981年—88年）

インターハイ（2校出場）には新潟中央が6回、新潟商が5回、直江津と新潟南が各2回、新潟青陵が1回出場している。

この時期の著名選手としては、佐藤香代子（直江津 83—東芝：ABC大会日本代表）がいる。

この時期、活躍した選手では風間、五十嵐、昆、小林（素）（ともに新潟商 82）、山下、川口（ともに新潟中央 82）、浦沢、村木（ともに沼垂 82）、田辺（高田北城 82）、高橋（北越商 82）、番場（新潟青陵 82）、細谷（直江津 82）、稲田、金藤（ともに直江津 83）、寺沢、本間（ともに新潟商 83）、広川（長岡女 83）、細谷（新潟中央 83）、水野（新発田 83—日体大）、大島、小宮（ともに新潟商 84）、岩崎、室岡（ともに直江津 84）、松崎（直江津 84—日女体大）、守屋、伊藤、榎（ともに新潟中央 84）、井崎（沼垂 84）、茅原（両津 84—東女体大）、松村（新発田 84—日体大）、村松（新潟商 85—日体大）、武藤、杉本、星（ともに新潟商 85）、藤崎（新潟 85—新潟大）、桜井、千谷（ともに新潟 85）、近藤（新潟中央 85）、木賀（直江津 85）、小泉（新発田商 85）、長崎（泊 85—東女体大）らがいる。

続いて、小島、杉原、貝瀬、長谷川（ともに新潟商 86）、若松、斎藤（ともに新潟中央 86）、本間（沼垂 86）、小松（新潟青陵 86）、飯原（新潟南 86—拓殖大）、乙川（新潟西 86）、石井（北越 86）、中村（新潟 86—新潟大）、鷲尾（新潟清心 86—日女体大）、熊木（新潟南 86—東女体大）、大野（新潟中央 86—日体大）、広川（新発田 86—新潟大）、坂内、渡辺、渡部（ともに新潟青陵 87）、安藤（新潟南 87）、伊藤（新潟中央 87）、今井（新潟商 87）、大黒、田中（ともに新潟西 87）、伊藤（高田北城 87—新潟大）、南日、小林（知香子）（ともに新潟中央 88）、小林（知美）（新潟南 88—東女体大）、桑野（沼垂 88）、高橋（新発田商 88）、梶原（北越 88）、福本（新潟清心 88）、広沢、丸山、土田、片岡、青木（ともに新潟中央 89）、栗谷川（新潟商 89）、坂上（新潟北 89）、山田（新潟南 89）、三村（長岡中央 89）、角田（新潟青陵 89）、高橋（由）（新潟北 90）、楨（新潟南 90）、内山（長岡大手 90）、鈴木（新発田南 90）、高橋（真）（新潟北 91）らがいる。

<コーチ・指導者>

・中村重治

1922年三条市生まれ。旧制三条中学バスケット選手として活躍、明治大進学、2、3年次に第一中学のコーチを引き受け、主力メンバーが三条高校へ進学した1947年にそのままコーチを引き受け、その後45年超に亘り、同校を指導した。練習時は厳しいが、生徒の面倒見がよく、生徒からは「おやじ、おやじ」と慕われていた。地元企業の役員の大重責を担う中、就業時間後の5時過ぎから7時半まで日曜日も返上して指導に当たる。奥様の内助の功も有名。「試合に勝つことは、練習に勝つこと」徹底した基礎練習に加え、有力他チームを研究し、新戦法を生み出し、猛練習を重ねる中でチーム力のアップを図った。

その結果、48年の第1回インターハイでベスト8入り、52年には関東高校選手権、第5回インターハイで優勝。55年には、第9回インターハイ、国体で優勝する偉業を成し遂げた。その後も、63年、64年のインターハイで連続優勝の偉業を成し遂げた。63年春、当時まだ全国的に名前が知られていなかった能代工業が三条に遠征の際、中村監督が、能代工業の加藤監督にラーメンをご馳走しながら、指導方針等を伝授されたといったエピソードも語り継がれている。

中村コーチの指導内容は部訓として同校体育館の入り口に掲示されているが、参考までに記す。

- ・頑張るのは試合ではない、毎日の練習である。
- ・練習とは良い習慣をつけるとともに、悪い習慣を取り除くことが目的である。
- ・練習でできないものは、試合でもできない。
- ・徹底した基本練習がファインプレーを生む。
- ・実力とはいつでも出せる力、すなわち最低の調子の時、出せる力を言う。従ってその力の底上げが目標である。

・藤田純二

1928年新潟県生まれ。新潟師範（現新潟大学教育学部）卒業後、白山小学校に勤務する傍ら、乞われて北越商業高校（現北越高校）のコーチを務め、51年のインターハイでチームを優勝に導いた名将。その年のオールジャパンでは自らも選手として現役高校生を率いて「全北商クラブ」の名で出場、前年度の覇者日本鋼管を破る大金星をあげベスト4入りの快挙を成し遂げた。

「先輩が築き上げた栄光の歴史に励まされ、目標を掲げたように、今に時代の記録や記憶を次の世代に語り継ぐのは自分たちの務めだ」と話し、90年新潟日報に「籠球70年」と題して38回にわたり、県バスケット小史を連載した。更にミニバスの普及にも情熱を注ぎ、96年には登録数が500を超え全国一位を記録した。68年から74年まで県協会理事長、その後、会長も歴任。

・滝川恵右

1936年新潟県生まれ。日体大卒業後、高田北城高校に体育教員として赴任。チーム強化のため、上越地域の中学校の有力選手をリクルートすべく、中学校の指導者に働きかけた。同校は1900年創立の県立伝統校であり、当時、スポーツ推薦等の制度はなく、合格のための受験勉強の指導を中学教員に熱心に働きかけた。やがて、先生方の熱意と生徒達の努力が相俟って多くの有力選手が滝川の下に集まってくるようになった。

その指導方法は極めて厳しいものであったが、生徒に対するきめ細かな対応、面倒見の良さで生徒の信頼を勝ち取っていた。女子第三期の高田北城の素晴らしい活躍の陰の立役者・功労者。

・大滝和雄

1945年生まれ。新津高校から新潟大学へ。卒業後、高田女子高校他を経て77年新潟工業に赴任、監督としてバスケット部を指導、4年間の地道な指導が実り、82年3月のウィンターカップに初出場、同年のインターハイでは初出場ながらベスト8の戦績を収める。85年以降はインターハイに4年連続出場、88年3月のウィンターカップ、同年のインターハイでいずれも第3位の成績を収めた。新潟工業の黄金期を築き上げた立役者・功労者。

同校を19年率いる傍ら、新潟県全体の更なるレベルアップを目指し、毎年4月に全国の有力校を地元へ招き、バスケットボールカーニバルを開催する等、県高校レベルでの技術力強化にも尽力した。新潟医療福祉大学教授、県協会理事長、副会長、会長、日本協会理事も歴任。地元女子プロチームの新潟アルビレックスBBラビッツの監督も歴任。

<その他－新潟県出身の指導者>

・吉井四郎

1919年生まれ。戦前の選手としての活躍は冒頭に記した通りであるが、ここでは指導者としての吉井に焦点を当てたい。母校の東京教育大のコーチとして53年の全日本学生選手権、全日本総合選手権にそれぞれ優勝、62年から67年まで全日本男子監督を務め、この間、64年の東京オリンピックのコーチを務めた。その後、住友金属のコーチも務め、多くのバスケット指導者、選手に多大な影響を与えた。日本協会の理事、選手強化委員長も務めた。戦前のベルリンオリンピック日本代表の吉井精三郎氏は実兄。

・木村時也

1933年生まれ。旧制村松中学から東京教育大に進学、考え方、理論、技術などすべての面で吉井の大きな影響を受けた。教員の第一歩を学習院中高等科（女子）で踏み出し、その後、学習院大を経て雙葉学園に移り、長年に亘り、同校バスケット部を指導、66年には同校をインターハイに出場させた。東京女子教員チームの世話役としても再三再四国体に出場させた。

・富樫英樹

1962年生まれ。村上高校から日体大に進学。卒業後、新発田市本丸中学に教員として就任。バスケット部監督を16年間勤め、同校を全国大会常連校へ押し上げ、2回全国優勝へ導き、U16日本代表ヘッドコーチも務めた。2014年開学の開志国際高校バスケット部の監督に就任、16年にはインターハイベスト8に導き、18年には優勝に導く。そして22年には念願のウィンターカップ優勝に導いた。本丸中学時代に出会った中村和雄氏（鶴鳴女子高校を3度日本一に導き、実業団女子の共同石油を長年に亘り、常勝軍団」として指揮してきた闘将）から「目標なんて日本一以外ないんだよ」言われ、指導者としての意識が変わった。千葉ジェッツで活躍の富樫勇樹選手の父。

・倉石平

1956年生まれ。上越市出身で高校から上京、早稲田実業高校から早稲田大学へ進学。高校時代に春の選抜大会や国体で優勝。早稲田大時代もベスト5や得点王他数々の個人賞を獲得。熊谷組での現役で活躍し、全日本代表に。現役引退後は、引き続きヘッドコーチに就任。その後実業団のコーチを経て、母校の教員兼男女チームの監督に就任。日本協会男子強化部長や指導者育成委員長も歴任。

【編集後記】

今回、新潟県の高校バスケットボールの歴史を通観するに際し、資料の提供や情報整理の面で新潟県バスケットボール協会様には、多大なご協力を賜った。

更に、三条高校OBの田中正夫氏と高田北城高校OGの牧野（旧姓豊川）須江氏には資料や情報提供の面で多大なご協力を賜った。誌面を借りて謝意を表したい。

以上

事務局だより

[事務局]

- ◇ 96号掲載【先人の軌跡】—籠球・藍球・basket ball—の文中の「藍球（ランキュウ）」は、間違いで「籃球（ランキュウ）」に訂正します。ウィスコンシン州は、桃の産地で収穫の際に使用した「籠」（カゴ）をバスケットのゴールにしたもので、もちろん竹で編んだ籠であるから「籃球」が正しく、「藍球」ではありません。
- ◇ 全日本総合選手権の開催内容が変更となり、男子の選手権大会は、天皇杯となり決勝の開催時期が3月に変更、女子の選手権大会は、皇后杯となり決勝の開催時期が12月に変更されています。振興会では、来年度の「プラザ」発行時期を、国際大会の開催時期も考慮して調整します。
- ◇ 「プラザ 96号」から記事のフォントを「MS 明朝」から、より明瞭で読みやすい「BIZ UD 明朝 Medium」に変更しました。感想をお寄せください。
- ◇ 訃報：元日本協会事務局員として永く勤務され、振興会が大層お世話になりました田島芳江さんが令和5年1月18日に逝去されました。ここに、謹んで哀悼の意を捧げ、ご冥福をお祈り申し上げます（享年80）。
- ◇ 昨年10月に「シニア交歓大会」を開催しました。その際、70歳以上の大会開催の希望があり、参加予定チームの皆さんからご意見をお聞きし、本年の予定を、4月22日（土）、23日（日）に千葉県長生郡白子町での開催としています。
- ◇ 神田神保町の事務所は、当面、火曜日以外の所員在室となっています。不自由をおかけしますが、ご協力をお願いします。

以上



プラザ こぼればなし

- ◇ 「2022年のウインターカップ優勝チーム」は男女とも話題が華やかである。女子の京都精華学園中学高等学校は山本校長先生が助監督を務め、男子の開志国際高等学校富樫監督は男子全日本代表富樫勇樹選手の父親であると聞かされた。今までもあった話かもしれないが、優勝チームとして、過去にはなかった話であるまいか。話題が多いことはほほえましく感じる。大いに歓迎したい。
- ◇ 「Wリーグオールスター2022-2023 in 有明」は4月末に東西の2チームに選別されて有明アリーナで開催されるが、ファン投票(WE B投票)による選抜選手およびリーグ推薦選手並びにチーム名が去る2月8日にWJBLから発表された。詳細は改めて報告するが、東地区1位の町田瑠唯選手が8817票と2位の5493票に比べ2000票以上も多くのファンに支持されたにもかかわらず不参加と発表された。この不参加に理由の公表もなく、ただ理解してくださいでは主催者の責任を果たしていないのではないか。ファン支持あってのWリーグであることを自覚してほしい。
- ◇ 「80歳でも脳が老化しない人がやっていること」(著者：西剛志、発行所：株式会社アスコム)では、運動するならウォーキングより「脳活ドリブル」が良い(第4章)と書かれている。更に、サッカーのドリブルでなくバスケットボールのドリブルが良いとその方法が絵図で説明されている。
- ◇ 地域密着を主眼に発足したサッカープロリーグ「Jリーグ」がスタートして30年。サッカー協会 1921年設立・日本リーグ(1965~1992) Jリーグ(1993~)、バスケット協会 1930年設立・日本リーグ(1967・70~2007) Bリーグ(2016~)、プロバスケットボールBリーグの将来は、今後の運営如何であると考えている。

NPO法人
日本バスケットボール振興会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町 1-40
豊明ビル 301号室
電話/FAX (03) 3219-9311
メール contact@jbbs.jp

神田バスケットボール資料室

戦後の国際交流試合(1950~1954)

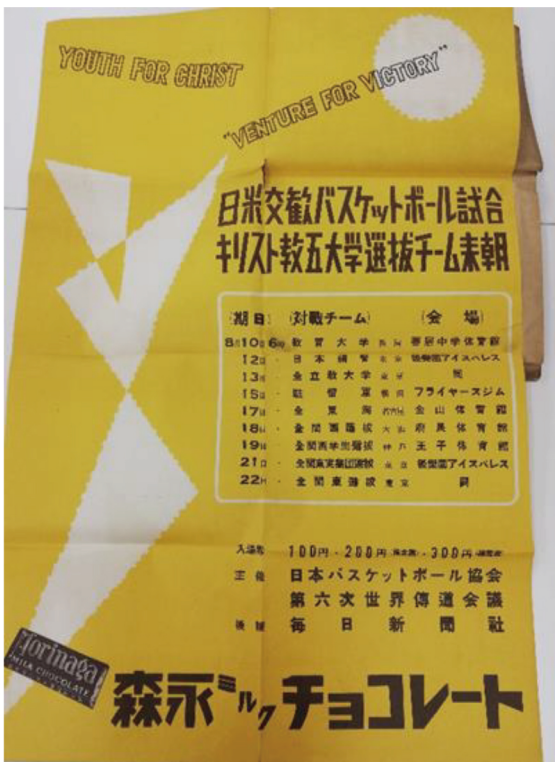
資料提供 羽佐田恭正文庫



1952年2月 日比交歓バスケットボール大会ポスター

フィリピンから「PAL スカイマスターズ」(フィリピンエアラインズ)チームが来日。

アジアトップクラスの実力のチームで7勝1敗の戦績。日本協会が、戦後初めて主催した国際試合。会場のメモリアルホールは、連日1万人近くの観衆を集め新聞に大きく報道され平和な日本をアピールした。



1953年8月 日米交歓バスケットボール試合ポスター

YMCA の招待で、VFV キリスト教5大学選抜(第六次世界伝道会議)チームが来日。戦績は5大学選抜チームの8戦8勝

「神田バスケットボール資料室」には、提供された諸氏の氏名を冠し、「〇〇文庫」として資料をまとめ保管しています。今回は、「羽佐田恭正文庫」(羽佐田恭正さんより寄贈された資料)の中から「国際交流試合の資料(1950~1954)」を掲載しました。